

実施報告書刊行にあたって

我が国は本格的な高齢化時代を迎えておりますが、アクティブシニアはエネルギーで知識欲求が強く、何らかの社会貢献に資する地域コミュニティ活動に参加したい意欲が旺盛であることが明らかになっています。そこで産・官・学が連携して高齢者の社会進出を促し、高齢者が今まで培ってきた知識・経験・ノウハウを有効に活用して、子供の学びや子育てのサポート、地域活性化、地方創生等に広く寄与できる機会や環境を整備することは、高齢者の生きがいと健康長寿に繋がると同時に、社会的・経済的・財政的にも極めて重要な課題であると言えます。

その一方で、地方公共団体・大学等において多彩に展開されている生涯学習のプログラムから、高齢者による地域活性化へとつなげるネットワーク作りは、未だ十全に整っているとは言い難く、さらなる改善が必要とされております。この問題の解決に向けて本年度より開始された、文部科学省の「高齢者による地域活性化促進事業」の一環として、立教大学では文部科学省との共催により、2016年3月2日に「長寿社会における生涯学習政策フォーラム 2015 in 立教大学」を開催しました。

本フォーラムは、高齢者の生涯学習や地域活性化に携わる産・官・学の関係者が一堂に会し、成功事例から得られる知見を共有するとともに議論を行い、今後の政策や活動への波及を期するもので、全体を以下の3部に分けて発表と意見交換を行いました。

第1部では、韓国ソウル特別市との緊密な連携のもとに、高齢者の社会参画の促進に向けた活動を展開している、(社) 50+Korean の崔相泰研究所長と、RSSC サポートセンターの坪野谷雅之顧問による基調講演が行われた後、コメンテーター（三菱総合研究所プラチナ社会研究センター主席研究員 森卓也氏）を加えたパネルディスカッションを行いました。第2部では、高齢者による地域社会活性化の成功事例、先導的な取組について、7件の事例が報告され、さらに報告者とコメンテーターとの対話を行うことによって、それぞれの事例の持つ意義についての認識を深めることができました。第3部では、第1部、第2部の内容を踏まえ、「生涯学習から高齢者による地域活性化へのネットワーク作り」というテーマについて、ワークショップ形式で討論と発表会を行いました。ワークショップ形式の討論においては、「高齢者」の当事者である RSSC 受講者の方々にファシリテーターとして参加していただき、活発なディスカッションが行われました。

当日は、第3部まで多くの参加者が主体的にディスカッションに加わっていただき、文部科学省「高齢者による地域活性化促進事業」への関心の高さが改めて認識されました。この実施報告書は、当日の発表ならびにディスカッションの要旨、アンケート結果の紹介を中心にまとめたもので、当日参加されなかった各方面の関係者における今後の政策形成・活動に対し、何らかの寄与を果たすことができれば幸いに存じます。

立教大学副総長
加藤 睦

第一部 基調講演 1 「韓国の生涯学習と高齢者の社会参画」 要旨

チェ サン テ
50+コリアン研究所長 崔 相泰

本日、私は「韓国の生涯学習と高齢者の社会参加」についてお話をいたします。まず、韓国の少子高齢化の現状について説明し、次に、韓国の生涯学習と高齢者の社会参加の事例として、ソウル市の 50+政策と私が勤めている 50+コリアンの活動について紹介いたします。そして今後の展望と課題でお話をまとめたいと思います。

○韓国の少子高齢化の推移

韓国の平均寿命は 82.4 歳（男性 78.9 歳、女性 85.4 歳）で、65 歳以上の高齢者は増え続けており、出生率が 1.24 で、14 歳以下の人口は減り続けています。そして、15 歳から 64 歳までの経済活動人口は減っています。

したがって、来年には人口のうち 65 歳以上が 14%を超えて高齢社会になりますし、2026 年には 20%を超えて超高齢社会に入ることになります。日本もヨーロッパより速いスピードで高齢化が進みましたが、韓国では高齢化が世界で最も急速に進められています。

ここで韓国の人口構造についてみると、人口 5,080 万人のうち、65 歳以上の人口は 686 万人です。韓国のベビーブーマー（団塊世代）は、韓国戦争の後の 1955 年から 1963 年生まれまでの人たちですが、714 万人で、人口の 14.6%を占めています。

これに、高度経済成長期に生まれた第 2 次ベビーブーマー、1968 年から 1974 年生まれまでの 606 万人がいて、この人たちも老後の準備を考えなければならない時期になっていると思います。

○人口構造の変化（シニアシフト）

グラフで見ると、2010 年時点でも安定的なピラミッドではありませんでしたが、2050 年になると、全体の人口が 14%減少し、高齢者人口は 1,100 万人増えることになります。シニアシフトが起きて、50 歳以上の人口がもっと大きくなって問題になります。この主な原因は、低い出生率によるもので、デビッド・コールマンというオックスフォード大学教授は、2750 年に地球上で人口が消滅する第 1 位の国として韓国を取り上げました。

○なぜ 50+か

先にお話した少子高齢化とシニアシフトという大きな社会の変化の中で、私たちは特に 50+世代に大きな関心を持っています。50+とは 50 歳から 65 歳を指しますが、韓国では 5060 とも呼ばれています。

ソウル市に 50+世代は 214 万人で、全人口の 21.5%を占めており、14 歳未満（119 万人）と、65 歳以上（119 万人）の人口の 2 倍で、絶対的に大きな規模です。

特に韓国の平均退職年齢は 53 歳で、非常に早く会社を辞めていまして、今ベビーブーマーが退職をしています。一方、公的年金の額は非常に低く、支給開始年齢も 60 歳から 65 歳に段階的に移行していますので、老後所得の空白が起ってこの時期を「所得絶壁クレバス」と呼んでいます。したがって、多くの人々が 70 歳まで仕事をしながら、実際の平均引退年齢は 71 歳です。

また 50+世代に注目するのは、人生 100 歳時代における第 2 の人生を新たに計画し、準備する時期で、ライフサイクルにおいて最も重要な転換期でもあり、老後生活を準備をすることができる最後の時期でもあるからです。

また、この 50+は、社会参加、労働に対する認識と態度、健康、価値観など、今までの高齢者と異なる特性とニーズを持っているので、新しい観点から政策的に対応する必要があります。韓

国での 50+は能力、意志、経済力を備えた、以前にはいなかった新世代、ニューシニアです。

○ソウル市の 50+政策について

ソウル市では、「ソウルを変える活気に満ちた 50+」というビジョンを持って、未来準備のために教育強化、雇用創出、社会貢献の活性化、健康と余暇の支援拡大を 50+政策として推進しています。

対象は、ソウル市在住の 45 歳から 65 歳までの 297 万人、人口の 29%が主なターゲットですが、単に 50+という年齢的な区分ではなく、100 歳時代の人生二毛作の準備が必要なすべての市民を対象にしています。つまり早期退職者、引退者ばかりでなく、今勤めている会社員、経歴断絶女性などを包括していますし、特に活動的で主体的に生きることを望む新老年層、エクティブシニアをターゲットにしています。これは、100 歳時代に「新しい人生創造のためのムーブメント」で、ワーク、福祉、学習のハーモニーが実現できるように、転換、準備、調和をキーワードにしております。

50+政策の具体的な内容は、専門的な相談や教育を通じた人生の再設計をサポートし、協同組合の設立などを通じて 50+仕事を発掘、拡散することです。また社会貢献ハブを作って社会参加の機会を広げること、50+コミュニティの育成、健康、文化、余暇の支援、調査研究、広報、文化の拡散などです。

ソウル市は 50+政策を推進するために、まずシンクタンク、コントロールタワーとして 50+財団を設立します。現在、保健福祉部に申請し、審査中ではありますが、3 月中に設立されると思います。

そして、ソウル市内を大きく 5 つに分けて、それぞれの地区に 50+キャンパスを作ります。ここはワーク、学習、福祉の総合文化空間であり、教室、セミナー室、相談室、コミュニティ活動のスペースを備えます。50+キャンパスでは、セカンドライフ、セカンドキャリア講座などの教育を実施しますし、相談や情報提供、コミュニティ、サークル活動の支援、雇用創出、起業の支援、才能寄付（プロボノ）、ボランティアなどの社会参加の支援、ブックカフェ、コミュニティレストランなどがありまして余暇や日常生活をサポートします。またここでは世代交流ができるセミナー、フォーラムなどのイベントも開かれます。

第一段として今年 4 月に西北キャンパスがオープンされますし、11 月に都心キャンパスが、来年には西南キャンパスを開館する予定で、東北、東南キャンパスは、現在設計を募集しているところです。

また、ソウルには 25 の区がありますが、その内の 20 区に草の根のプラットホームとして 50+センターを設置して地域活動を支援することになります。今までソウル二毛作センター、都心二毛作センターがありましたが、先月にドンジャク 50+センターがオープンしました。

ソウル市は、生涯学習のポータルサイトを開設しており、多くの人々がこのサイトを通じ、サイバー学習、教育プログラムの情報を手にいれることができますし、才能寄付、社会参加の機会を見つけることもできます。

○50+コリアンについて

50+コリアンは中高年層、シニア世代の権利増進と豊かなセカンドライフのために必要な情報やサービスを提供することで、生活の質（QOL）を向上させるために作られた非営利社団法人、NPO です。退職後の生活の中で意欲が落ちた 50 歳 60 歳代の人々が自己革新を通じて未来社会の変化を主導する革新的な創造運動として 50+コリアン運動を展開しています。

50+世代の生涯学習を通じて韓国人の認識を改善し、活気のある老後の生活文化を広げることと、この人たちの権益を保護するために調査研究、政府や自治体に政策提言をしております。

また自治体、公共機関、企業などとシニアの雇用創出ができるシニアビジネスをしており、50+世代が社会貢献をすることができるコミュニティを作って社会参加の機会を提供しています。今後は海外にいる韓国人のためのプログラムも作る予定です。

○教育プログラムの例

今、最も人気があって、テレビや新聞に何度も取り上げられたスマート映像作家の養成講座について皆さんに紹介したいと思います。

この講座は、昨年 6 月にソウル市が推進する「未来型の新職業の養成事業」の公募に採択され、実施することになりました。ソウル市の支援を受けて、放送、映画、広告など映像関連分野で退職した人、または退職予定者を対象に、新たに撮影、編集技術を教えて、これを就業、起業につなげる教育です。例えば、家族、企業、村の歴史などをデジタル映像で記録して商品化する新しい職業を作るプロジェクトです。

昨年 8 月に始まり約 3 ヶ月間、毎週二日ずつ、124 時間の講義と実習が行われ、27 人が課程を修了しました。現在は 2 期の 30 人が授業を受けています。受講生は、ドラマ作家をはじめ、放送局のプロデューサー、記者、広告会社などで現役時代の知識と経験を生かして、セカンドライフを楽しもうとする人々です。平均年齢は 60 歳です。

カリキュラムには、スマートフォンやコンピュータなどの IT 技術をはじめ動画撮影のテクニックと編集プログラムまであります。また個人のノートブックやスマートフォン、編集 SW などを活用した実習、ドキュメンタリー企画、取材、インタビューなどで構成されています。コース後半にはブログのプロモーション方法や事業計画書の作成方法なども習得します。

修了すれば、作品を企画して自分のスマートフォンで撮影し、PC で編集することができます。そして、再就職、1 人起業、協同組合などを通じて、人生二毛作を準備することができます。また映像作家たちは、小学、中学のオープンクラスで学生たちにスマートフォンの撮影、編集を教えて世代の交流もする予定です。

○韓国シニア産業協議体について

韓国シニア産業協議体（Korean Society on Aging）は、50+コリアンが運営しているサービスプロバイダのネットワークで、高齢社会を迎えて、安心して活力ある長寿社会をリードしてシニアに優しい環境づくり、シニアが幸せで便利な生活ができる商品とサービスを提供するために作られました。

50+コリアンが中心となってユハンキンバリー、NH 投資証券、ハナ銀行、ロッテ観光などの民間企業との協力関係を構築し、ソウル市、国民年金公団、住宅年金公社、ソウル医療院、老人人力開発院などの自治体や公共機関とも協力関係を広げていくことになりました。現在のメンバーは 20 社で、50+コリアンが運営事務局になっています。

自治体、公共機関、企業が連携してシニアビジネスを展開し、企業のインフラを活用して、シニアの雇用を創出することができます。企業はシニア顧客を確保することができ、新しい流通チャネルとマーケティングのフレットホームとして活用することもできます。

その事業の一つとして、ユハンキンバリー、老人人力開発院、50+コリアンが共同投資して公益流通企業であるシニアハブという株式会社を作りました。政府（保健福祉部）より高齢者親和企業として指定されましてソウル市内に 2 つの店舗を運営しています。

ここではユニバーサルデザイン製品、アイデア商品、シニア向けの用品を販売していますが、シニアビジネスのアンテナショップで現場調査もおこなっています。従業員は、60 歳以上の方々を雇用して、シニア雇用創出のために努力しています

またシニアハブは、韓国シニア産業協議体のメンバーと一緒にシニア総合生活支援サービスも展開しています。一千世帯以上の大規模マンション団地、住宅地域、伝統市場で総合生活サービスセンターを設置しまして、宅配便、整理収納、認知症や転倒の予防教育、ホームケア、ヘルスケア、スマートホームなどの総合的な生活支援サービスを実施しますし、シニアの雇用創出もしています。総合生活支援センターの例として、韓国の大手物流会社である CJ 大韓通運が 2013 年から始めたシルバー宅配便が挙げられます。これは、シルバー安心宅配といいまして、企業と地域社会が共に成長する共有価値の創出（CSV : Creating Shared Value）活動です。大規模のアパート団地で宅配会社の配達員が団地内の拠点まで品物を配達すると、シニア配達員が電動カ

ートを利用して品物を各家庭に配達します。現在、ソウル、仁川、釜山など 70 拠点に約 500 人のシニアが配達員として活動しており、今年 1,000 人を雇う予定です。

○シニアマーケットの養成

50+コリアンでは 50 歳以上の再就職の希望者とシニア顧客を対象に相談と販売をする人たちのための教育プログラムを運営しています。

人口の高齢化により、すべての産業でシニア顧客が増加して、シニアを理解していなければ、マーケティングとセールスも難しくなります。したがって、高齢者のニーズを把握させ、ユニバーサルデザインなど、高齢者向けの用品の使用方法、シニア顧客の応接やコミュニケーションの技術、実際のシニア用品の販売実習やグループディスカッションなどの教育をしています。これによりシニア雇用創出とシニア産業の活性化に貢献していきたいと思います。

○50+社会貢献型の雇用創出

ソウル市二毛作センターでは次のような 50+社会貢献型の雇用創出に取り組んでいます。

- ・敬老堂コーディネーター：敬老堂で高齢者の余暇活動、教育などのプログラムについてアドバイスを行う。
- ・事例管理サポーター：シニアの社会福祉士が訪問して福祉対象者を支援する。
- ・家庭経済相談士：訪問相談を中心に家庭経済について支援、連携する。
- ・シニア村サポーター：地域共同体の活性化を支える公務員をサポートする。
- ・都市菜園活動家：子供たちに菜園活動の授業を行い、人間性を育成する。
- ・2090 知恵アカデミー：「20 歳の知恵を 90 歳まで維持しよう」ということで、軽度の認知症を持っている人に認知機能を維持・向上させるための訪問学習サービスを行う。

○展望と課題

これまでソウル市 50+財団と 50+コリアンが実施している生涯学習と高齢者の雇用創出の事例についてお話をいたしました。これは、個人のセカンドライフの問題や地域社会の課題を同時に解決して生涯現役社会を実現させようとする試みです。

私は基本的に新しいシニアは、本人が現役時代の経験と知識を活かして、地域社会に貢献し、その中で小さいながらも収入を得ることができる新概念の仕事、つまりアンコールキャリアを実現するのが理想的だと思います。そして、新しいシニアライフは仕事と生涯学習と余暇がバランスを合わせて生きていくことがカッコイイと思います。

そのためにはセカンドライフをサポートするシステムと組織が必要ですし、生涯学習が雇用創出と社会貢献活動に繋げることが必要だと思います。

しかし、現実には生涯学習（教育）を仕事や社会貢献に連携させることは非常に難しいし、仕事の質にも問題があります。現在、高齢者の雇用創出は、韓国で最も大きな課題となっている青年失業の問題との衝突も起きています。誰もが幸せな長寿社会を作るためには、政府、企業、地域社会、個人のみんなが一緒に力を合わせなければなりません。

私は本日、このフォーラムを通じて、多くのアイデアが共有されて、高齢者が生涯学習を通じ、地域社会に貢献することができ、本人も老後の生活において生活のやりがいを感じることができるようになればと願っています。

今、始まったばかりである韓国の高齢化の対策については、超高齢社会であり、高齢化の課題解決の先進国である日本から学ぶことが沢山あると思います。これからもご協力とご指導をお願いします。

ご清聴ありがとうございました。

韓国における生涯学習と 高齢者の社会参画

2016. 3. 2

長寿社会における生涯学習政策フォーラム

50+KOREAN研究所長
崔 相 泰

チェ サン テ
講師：崔 相 泰

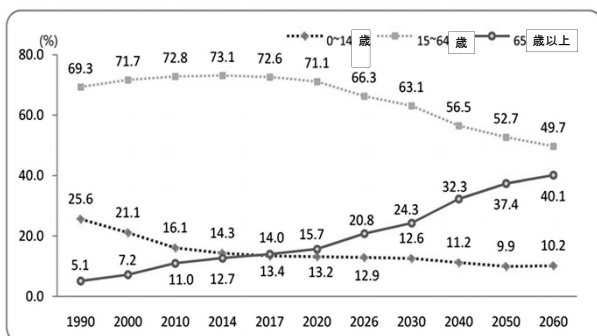


- ◇ (社)50+KOREAN研究所・所長
- ◇ ソウルデジタル大学校・特任教授
- ◇ 前)三星生命・引退研究所研究委員
- ◇ 前)保険開発院・常務
- ◇ 早稲田大学大学院商学研究科修士、博士課程修了

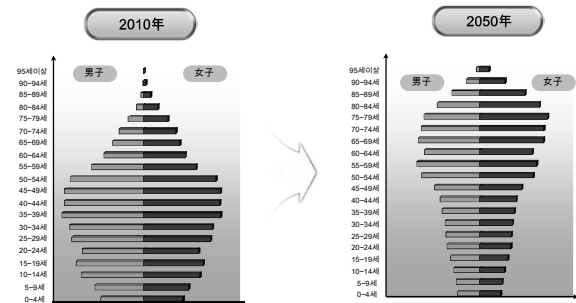
目次 (contents)

1. 韓国における少子高齢化の現状
2. ソウル市の50+政策
3. (NPO)50+コリアンの活動
4. 高齢者の社会参画の事例
5. 展望と課題

韓国における少子・高齢化の推移

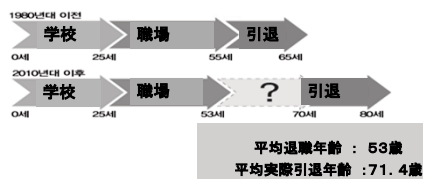


人口構造の変化(シニアシフト)



なぜ 50+なのか？

- ◆ 50+ : 50歳-65歳
- ◆ ソウル市の 50+ : 最も大きな人口集団
- ◆ ベビーブーマーの本格的な退職
- ◆ 人生 100 歳時代を迎え、高齢期に対する認識の転換が必要
- ◆ ライフサイクルにおいて最も重要な転換期
- ◆ 既存のシニアと異なる特徴とニーズ



ソウル市の50+政策

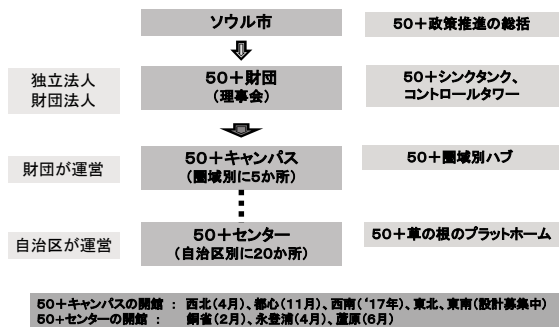
vision	ソウルを変える活気ある50+			
推進方向	未来準備 教育の強化	雇用 創出	社会貢献の 活性化	健康、余暇 支援拡大
対象	ソウル市の45~65歳(297万名、全体の29%) ・単純に年齢の区分でなく100才時代を準備するすべての市民 ・退職者、引退者、勤め人、養育継続女性など ・新老年層、active senior			
内容	100歳時代に“新しい人生創造のためのムーブメント ワーク+福祉+学習のハーモニー			
キーワード	転 換	準 備	調 和	

50+政策の具体的な内容

- | | |
|------------------|--|
| 1. 人生再設計の支援 | <ul style="list-style-type: none"> 人生再設計のワンストップの総合相談センター 人生再設計の専門的な教育課程の運営 |
| 2. 50+のための雇用創出 | <ul style="list-style-type: none"> 50+インターンシップ・プログラムの運営 公的機関の雇用創出の拡大 50+による協同組合の設立の推進 |
| 3. 社会参加の支援 | <ul style="list-style-type: none"> 社会貢献のハブの構築 地域社会の参加機会の拡大 |
| 4. 50+コミュニティの育成 | <ul style="list-style-type: none"> 分野別の協力システムの構築 50+団体に成長段階別のオーダーメイド支援 専門人材の育成 |
| 5. 健康、文化、余暇の支援 | <ul style="list-style-type: none"> 50+日常活動の支援 人生後半に相応しいライフスタイルの提示 |
| 6. 研究調査、広報、文化の拡散 | <ul style="list-style-type: none"> 研究調査 統合コミュニケーションの戦略 ネットワーク |

SDU

ソウル市の50+政策の推進体系



SDU

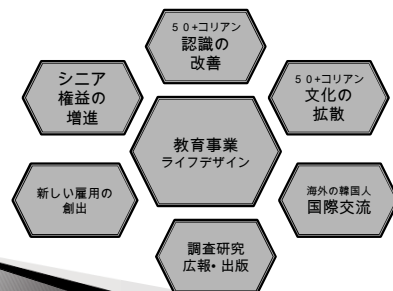
50+キャンパスの事業

- | | |
|----------|---|
| 教育 | <ul style="list-style-type: none"> 50+コンテンツの開発 セカンドライフ講座、セカンドキャリア講座、趣味等 |
| 相談、情報の提供 | <ul style="list-style-type: none"> 相談センター運営、コンサルタントの養成 |
| 活動支援 | <ul style="list-style-type: none"> 50+コミュニティ、学習サークルの支援 |
| 職場・起業の支援 | <ul style="list-style-type: none"> 50+に適合した職種の開発、起業の支援 共同事務所の提供 |
| 社会参加の支援 | <ul style="list-style-type: none"> 才能の寄付(プロボノ)、ボランティア活動 |
| 日常の支援 | <ul style="list-style-type: none"> ブックカフェ、コミュニティ食堂、健康支援 ギャラリー、小劇場 |
| 企画事業 | <ul style="list-style-type: none"> 世代交流、セミナー、フォーラム、トークショー アイデア募集 |

SDU

50プラスコリアン(50+Korean)の紹介

- ◆ 中高年層、シニア世代の権利増進と豊かなセカンドライフのために必要な情報やサービスを提供することで生活の質 (QOL) を向上させる
- ◆ 非営利社団法人(NPO)



スマート映像作家の養成講座

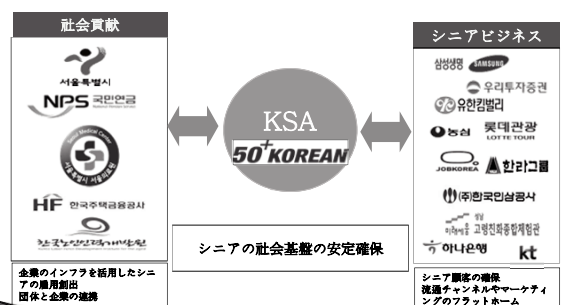
- ◆ 対象：放送、映画、広告等の映像分野での退職 (予定) 者
- ◆ 時間：124時間
- ◆ アナログよりデジタルへ
- ◆ カリキュラム

- | | |
|-------------|------------|
| 企画取材 | デジタル映像編集 |
| インタビュー実習 | アニメーション編集 |
| ドキュメント構成 | エディタース実習 |
| 撮影実習 | マーケティング・営業 |
| アナログよりデジタルへ | SNS 連携 |



韓国シニア産業協議体 (Korean Society on Aging)

シニアに優しい環境作りを目的に共同プロジェクトの運営



公益流通企業：(株)シニアハブ

- ◆ ソウル市内に2つの店舗を運営、シニア向けの用品の販売、ネット販売
- ◆ シニアビジネスの調査研究、シニアの生活支援、シニアの雇用創出



Active Life for Everyone アクティブシニアのためのユニバーサルデザインストア

50+コリアン、ユウハンキムバリ、老人力開発院が共同に参加

シニア総合生活支援サービス

- ◆ 大規模な団地(1千世帯以上)や住宅密集地域、伝統市場
- ◆ サービスの内容
 - 宅配：団地の中のマンションを拠点に活用
 - 整理収納：ライフ・オーガナイザー、片付け
 - 教育：認知症、転倒の予防
 - ホームケア：相談、個人生活支援、外出、買い物のヘルパー
 - 健康：健康管理、介護、成人用オムツ
 - スマートホーム：

- ◆ 効果
 - シニアの生活支援
 - シニアの雇用創出
 - 共通認識の拡大



CJ大韓通運：シルバー安心宅配

- ◆ シニアを活用した大規模な団地における宅配サービス
- ◆ シニア層の持続可能な雇用確保のためのモデル
- ◆ 宅配会社の配達員が団地の拠点まで品物を配達と、拠点から各家庭まではシニアが配達



シニア・マーケターの養成

- ◆ 目的
 - シニアの雇用創出、シニア顧客の理解、シニアに対するサービスマインドの向上
- ◆ 対象
 - 50+再就業者、シニア顧客の相談及び用品の販売者
- ◆ カリキュラム

シニアの理解	▪ 高齢社会とシニアの生活設計 ▪ シニアビジネスの事例
シニア向け商品	▪ ユニバーサルデザイン商品 ▪ 商品の種類や理解
販売スキルや練習	▪ シニア用品の販売 ▪ インターン実習、グループ討論
シニアの応対	▪ シニア顧客の特徴 ▪ シニアとのコミュニケーション

50+の社会貢献型の雇用創出(事例)

- ◆ 敬老堂コーディネーター
 - 敬老堂で高齢者の余暇活動、生涯学習などのプログラムについてアドバイス
- ◆ 事例管理サーポーター
 - シニアの社会福祉士が訪問して福祉対象者を支援
- ◆ 家庭経済相談士
 - 訪問相談を中心に家庭経済について支援、連携
- ◆ シニア村サポーター
 - 地域共同体の活性化を支える担当公務員をサポート
- ◆ 都市菜園活動家
 - 子供たちに菜園活動の授業、生命の大切さを教えながら人間性を育成
- ◆ 2090知恵アカデミー
 - '20歳の知恵を90歳まで維持しよう'
 - 軽度の認知症を持っている人に認知機能を維持・向上させるための訪問学習サービス

展望と課題

- ◆ 生涯現役社会の実現：個人のセカンドライフの問題と地域・社会の課題を同時に解決する
- ◆ アンコールキャリア：現役時代の経験と知識を活かせる形で地域で社会貢献
- ◆ ワーク・生涯学習・余暇のバランス
- ◆ セカンドライフの支援組織・システムの構築
- ◆ 生涯学習を雇用創出や社会参画に繋げる
- ◆ 青年失業と高齢者の雇用創出の衝突
- ◆ 政府、企業、地域社会、個人が一緒に作る長寿社会を実現

第一部 基調講演2「生涯学習の先駆的取り組みと社会貢献活動」要旨

立教セカンドステージ大学兼任講師

RSSCサポートセンター顧問 坪野谷雅之

2008年4月に立教大学が社会的責任の一環として、日本でもユニークな高齢者の先駆的な生涯学習の「場」として創立した立教セカンドステージ大学（以下、RSSC）は、各方面から注目されて8年に亘る大いなる実験と挑戦を展開してきました。今日のフォーラムで、創立から現在まで教育と運営に携わってきた私が、多くの在学生・修了生と一緒に、基調講演の第一部『RSSCの概要』、第二部『社会交流と貢献活動の仕組み作り』、第三部『シニアのこれからの多様な生き方』を通じて、地域社会からアクティブシニアに期待される現状と展望を述べることは、大変光栄であり、多少なりとも参考になれば幸いに存じます。

第一部『RSSCの概要』 RSSCはアクティブシニアの「学び直し」「再チャレンジ」「異世代共学」を目的に、50歳以上を対象とした斬新な生涯学習であります。ハードルの高い入学試験（エッセイと面接）を経て、毎年度100名前後の本科生（1年）が入学し、希望すれば審査を経て過半数が専攻科（1年）に進学します。3科目群（それぞれ約15科目の45科目）の必修・選択・ゼミナールの修了論文作成という単位制を採用し、強い絆で結ばれた学友と一緒に、真摯に学びキャンパスライフを謳歌している姿は正に生涯現役であり、一方ではこれからの生き方を模索する一種のコミュニティ集団でもあります。ここでは早くも大学と受講生が一緒になり、RSSCを創るという伝統と文化が息づき、リベラルアーツに裏付けられた「自由な市民」を醸成する様々な工夫がなされています。

第二部『社会交流と貢献活動の仕組み作り』 RSSCで1年乃至2年間学び自分の人生設計を描きながら、修了後の新たな社会との交流や社会貢献に寄与する生き方は生きがいに繋がり、明るく楽しく元気な健康長寿の源であります。この“出口戦略”こそが「RSSC社会貢献活動サポートセンター」の存在です。ここに登録する多彩な13の研究会に在校生・修了生764名の45%、346名が会員として活躍し、個人の社会貢献活動を加えると6割超にも達しています。これはRSSCの学びから生じる成果であり、こうした革新的外延活動が地域活性化のネットワーク作りでもあると考えます。

第三部『シニアのこれからの多様な生き方』 受講生や修了生がRSSCで学び、社会交流と貢献活動の研究・演習・実践で習得したものは生涯の財産であり、地域社会から求められるアクティブシニア像とも言えます。あるゼミナールにおける専攻科生グループから、課題解決型研究手法（PBL: Project Based Learning）で提案された、新しいライフスタイル“シニアは社会のコストではなく、将来に寄与する成熟した『社会の担い手』である”は非常に示唆に富んでいます。そして、自分の知識・経験・ノウハウ・趣味・性格を生かして活躍することが、仲間や地域社会から大いに期待されています。勿論そこには、地域社会に融和する勇気ある一歩や好感を持たれるマナーの存在も忘れてはならない大切な要素であります。

以上

立教セカンドステージ大学

Rikkyo Second Stage College

高齢者の 生涯学習の先駆的取り組みと 社会貢献活動 ～学び直し・再チャレンジ・異世代共学～

2016年3月2日
立教セカンドステージ大学兼任講師
「社会貢献活動サポートセンター」顧問
坪野谷雅之 RSSC M.Tsubonoya

第一部

「立教セカンドステージ大学の概要」

“学びの情熱尽きることなく”
～RSSCのキャッチフレーズ～

* Rikkyo Second Stage Collegeの略称

RSSC M.Tsubonoya

I. RSSCのシステム

1. 設立: 2008年4月 シニアの生涯学習の「場」
～高齢化社会における立教大学の社会的責任の一環
2. 目的: 「学び直し」「再チャレンジ」「異世代共学」
～自由な市民としての教養の修得・社会で役に立つリーダーの輩出
3. 構成: 50歳以上の男女・入学進学試験制
～入試による本科(1年)・希望すれば専攻科(1年)進学
4. 科目: 必修・選択・ゼミナール・単位制
5. 課外活動・委員会活動・社会貢献活動
～コミュニティでの生き方の学びと実践

* 学校教育法第102条の「履修証明書」交付

RSSC M.Tsubonoya

II. 入試の概要

1. 課題エッセイ『人生の振り返り』の提出
～志望理由・ボランティア活動・これからの生き方等(2,500字)
2. 教員面接
～「何を学びたいか」「学んだことをどのように生かしたいか」等
3. 本科定員70名・専攻科定員30名
～毎年100名程度の本科応募・男女半々・経歴は多種多様
4. 学費(本科・専攻科)
～受講料 300,000円 登録料 100,000円(本科のみ)

RSSC M.Tsubonoya

III. 入学者数の推移

年度	本科入学	(男性)	(女性)
2008	96	52	44
2009	109	53	56
2010	88	48	40
2011	79	34	45
2012	98	61	37
2013	100	57	43
2014	96	53	43
2015	98	50	48

RSSC M.Tsubonoya

IV. カリキュラムの構成

1. 「エイジング社会の教養科目群」(約15科目)
～「自由な市民」として豊かに生きていくための教養を習得
2. 「コミュニティデザインとビジネス科目群」(約15科目)
～シニア世代の生きがい創造と社会貢献への船出を支援
3. 「セカンドステージ設計科目群」(約15科目)
～高齢化社会でのシニアの役割、社会活動との関係のヒントを提供
4. 「立教大学全学共通科目」(年4科目選択制)
～異世代の若い学生と共に学び、未来を担う世代の理解の機会

RSSC M.Tsubonoya

V. 委員会活動の意義

1. 各種委員会活動

～自主的・主体的なコミュニティ活動の演習・実践の一環

「ゼミ長委員会」「副ゼミ長委員会」「ウエルカムパーティー委員会」
「納涼パーティー委員会」「ニューズレター委員会」(前期・後期)
「クリスマスパーティー委員会」「修了パーティー委員会」

2. 「ゼミ合同清里合宿」(ゼミ長委員会の主体的参画)

～学びと自然とリクリエーション、ゼミの枠を超えた交流

「教員講演」「グループディスカッション」「キャンプファイアー」「自然観察」

RSSC M. Taubonoya

VI. RSSCのミッション

1. 受講生・修了生の学びと社会進出の創意工夫

～受講生・修了生の多様性・進化するニーズへの対応

2. 知識・経験・特技・ノウハウの有効活用

～受講生・修了生が社会のコーディネーター・リーダーとして活躍

3. シニアの持続的生きがい創造

～学び・研究仲間との絆作り・社会承認の促進(マズローの欲求説)

4. シニアの生涯学習における「立教モデル」の普及

～外部情報発信・ネットワーク作り・人的交流の拡大

RSSC M. Taubonoya

第二部

『社会交流と貢献活動の仕組みづくり』

～「RSSC社会貢献活動サポートセンター」～

RSSC M. Taubonoya

I. 「社会貢献活動サポートセンター」

1. 2009年RSSCの組織体として設置

～在校生・修了生の社会交流・社会貢献活動促進

2. グループ研究・演習・実践の場

～グループの自発的・自主的活動の展開
本科必修授業で年次発表会2回(春学期・秋学期)の開催

3. 生涯の繋がり・活動の喜び・生きがい創造

～地域社会でのコーディネーター・リーダーの育成・輩出

RSSC M. Taubonoya

II. サポートセンター登録研究グループ

～2016年1月末現在～

「アジアの貧困とNPO/NGO支援研究会」(09/5)	* 20名
「かがやきライフ研究会」(09/11)	* 9名
「ウクレレ合唱団～高齢者施設訪問」(09/1)	* 30名
「日本に住む外国人を考える会」(10/2)	* 10名
「生きがい創造研究会」(11/11)	* 50名
「アクティブシニア研究会」(12/7)	* 39名
「コミュニティ活動研究会」(13/4)	* 32名
「プラチナ社会創造研究会」(15/3)	* 35名
「経済・社会問題研究会」(15/4)	* 34名
「キリマンジェロの会」(15/4)	* 10名
「オリパラレガシー研究会」(15/10)	* 26名
「RSACアカデミックコミュニティ」(15/10)	* 34名
「ソーシャルビジネス研究会」(16/2)	* 17名 * 登録待ち

(注)カルチャータンポールのグループ活動はRSSC同窓会の事業 RSSC M. Taubonoya

III. 研究グループ組成の要因

【組成の要因】

①サポートセンター担当教員の誘導 (6/13) 46%

～担当教員がニーズを醸成し仕掛ける

②授業を受けての刺激 (4/13) 31%

～授業や講演会で刺激を受ける

③学内組織体からの影響 (3/13) 23%

～各種委員会の仲間や既存研究会の分派

【サポートセンター登録研究会の会員数】 * 2016/1末現在

①会員総数346名 ⇒ 在校生・修了生764名の45%

②個人も含め社会貢献活動に関与する割合は6割超

RSSC M. Taubonoya

IV. サポートセンター機能と展望

1. 受講生・修了生の研究ニーズの醸成
～インキュベーション機能 (incubation: 孵化)
2. 研究グループ組成の仕組み作りと仕掛け作り
～クリエイション機能 (creation: 創造)
3. 外部団体等との仲介・紹介・ネットワーク作り
～インターメディアリ機能 (intermediary: 仲介)
4. 限りなき革新と持続可能性への挑戦
～イノベーション機能 (innovation: 革新)
5. 全研究会取りまとめ組織の自主運営
～在校生・修了生のボランティアによる事務局運営構想

RSSC M.Taubonoya

第三部

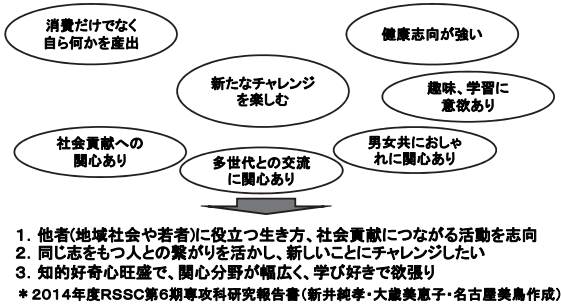
『シニアのこれからの多様な生き方』

～自分の知識・経験・ノウハウ・特技・趣味・性格を生かし、
コミュニティで活躍することが期待されている。～

RSSC M.Taubonoya

I. RSSC生の目指すクールな生き方

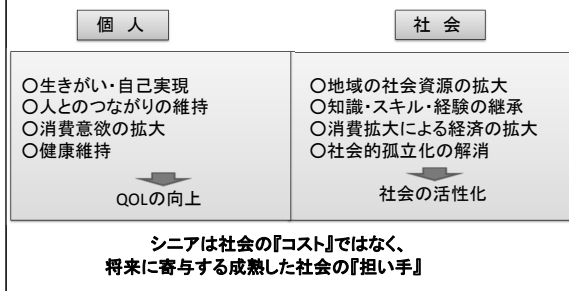
～RSSC受講生・修了生132名のアンケート～



II. シニアの新しいライフスタイルの提案

～前記研究報告書より～

退職は社会との新たな関わりの始まり。
現役は引退しても社会からは退職しない生き方。
個人のライフスタイルの変容が社会全体に変革をもたらす！



III. 社会貢献活動の分野を探す

～勇気ある大きな一歩を踏み出す～

1. 自分の培った知識・経験・ノウハウを活かす分野
～各種ボランティア・NPO/NGO/ソーシャルビジネスへの参加
2. 自分の性格・趣味・娯楽に合った分野
～お祭り・趣味・娯楽のイベントへの参加
3. 自治体、町内会、マンション管理組合への参加
～政策研究会・意見交換会・公聴会への参加
4. 自ら各種ボランティアグループ・NPO等の設立
～自分の経験や性格を活かした新たな企画・運営

* 各種講演会での啓蒙資料

RSSC M.Taubonoya

IV. 地域グループ参加のマナー

～好感を持たれるマナー例～

1. 明るい挨拶、柔和な笑顔、感謝、思いやり
2. 能動的に参加、汗を流す、労を厭わない
3. 聞き上手、自己主張を控えめに
4. 他者を尊敬、ほめる、おしゃれ、和気あいあい
5. 若い人の意見を尊重、人生のモデル

* 各種講演会での啓蒙資料

RSSC M.Taubonoya

第一部 パネルディスカッション

パネリスト（敬称略）

崔相泰（50+コリアン研究所長）

坪野谷雅之（立教セカンドステージ大学兼任講師、RSSCサポートセンター顧問）

加藤睦（立教大学副総長・文学部教授）

コメンテーター

森卓也（三菱総合研究所プラチナ社会研究センター主席研究員）

森：時間も限られているので、会場の皆さんがお聞きになりたいようなことを私が代わりにパネリストの皆さんにお聞きするような形で進めてまいります。まずは加藤先生にお聞きしたいのですが、お二人の基調講演の中で韓国の話、そして日本、とくに立教セカンドステージ大学の話があったわけですが、韓国と日本（立教セカンドステージ大学：以下RSSC）で同じことと違うこと、それぞれ感じられたことを教えてください。



加藤：大変難しいご質問ですが、やはり崔相泰先生のお話にもありましたように、韓国の場合はいわゆる定年の年齢が非常に若いということだと思います。53歳で定年というのはかなり厳しい。RSSCでは再雇用につなげる教育などはほとんど考えていませんが、韓国では、定年後も収入を得続けるという再雇用の課題があるということが大きな違いだと思います。一方、韓国での様々な試みの中で、いかにセカンドライフにおけるアクティブシニアの生きがいを作っていくか、あるいはいかに社会貢献に生涯学習をつなげていくかという課題については、RSSCだけでなく日本の各自治体などで試みられている取り組みの目標とほぼ一致していると思います。

森：そうですね。「50+Korean」の「50+」はまさに50歳以降も働いて食べていかねばならないという切実な問題があることを崔先生のお話から感じました。次に崔先生にお伺いします。坪野谷先生のRSSCのお話を聞かれて、「ああ、日本らしいなあ」と思ったことはありますか。

崔：本当に皆さん立派な教育を実践されていると思います。素晴らしいと思うのは社会貢献のグループ活動をされていることだと思います。教育をした後のコミュニティをどう作るかが大事です。ただ、韓国ではその成果を仕事にどうつなげるかも大きな課題となっています。

森：崔先生は、お話のなかで、青年失業の話題を出され、シニアの雇用創出との対立に触

れられました。世代間の交流は必要でありながらも、世代間で対立する関係でもある、この世代間関係についてお話いただけないでしょうか。

崔：日本ではアベノミクスや、東京オリンピック開催の効果があるのでしょうか、就職状況は良いのですが、韓国では大学を卒業しても就職できるかどうか誰もが心配しています。私はシニア世代の職場を確保するということと、学生たちの就職先を確保するということは両立できると思っています。シニア世代は自分の経験や知識を生かしていける職場を目指せばよいのです。ただ、若者も就職できないのにどうしてシニア世代の職場をつくる必要があるのか、という声もあります。



森：そうですね。韓国は日本とずいぶん状況が違っていることがわかり、参考になりました。では次に坪野谷先生にお伺いします。崔先生のお話を伺って、RSSCでも参考になると思われる取り組みは何かありましたでしょうか。

坪野谷：RSSCの場合はあくまでも大学サイドから見た地域連携の取り組みの紹介でしたが、「50+Korean」の取り組みは広い社会的企業活動や事業も視野に入れた展開をされていて、とても感銘を受けました。

森：坪野谷先生のお話は、主に立教大学としての取り組みの紹介でしたが、崔先生のお話は、主にソウル市など行政の政策と直結した取り組みの紹介であったと思います。そこでまた崔先生にお伺いしたいのですが、こういった生涯学習とシニア世代の活躍を語る際に、韓国の大学はどの程度関わっているのでしょうか？

崔：韓国の大学でも生涯学習には関心が高いです。「シニアライフのデザイン」という講座を開講している大学もありますし、人文社会系の大学では、老後生活をどうするか、といったシニアのライフデザインが大きな課題となっていて、そういったことに関連する新しい講座を作ったり、RSSCのような教育プログラムを開設しようと動き出しているところです。「50+Korean」では昨年、ソウル大学と一緒に、会社の退職準備のための教育プログラムをつくりました。

森：日本でも、定年間近の会社員を対象としたような「セカンドライフ研修」のような研修が社内であったりするのですが、非常に評判が悪い。急に自分の人生を振り返らされて、老後の不安を煽り、最後に投資信託を勧めるような内容がほとんどのようです（会場笑い）。ところで、韓国ではどのような講座がシニア世代の方々には人気なのでしょう。

崔：韓国では老後の所得に関わる問題が大きいので、これまでは財産形成に関する講義が人気でした。しかし、シニアライフの課題はお金だけではなく、健康、人的ネットワーク、時間の有効活用などをテーマとした講座にも取り組んでいます。

森：ではまた坪野谷先生にお聞きしたいのですが、RSSCも開校されて8年目を迎えられ

たわけですが、その間、開講科目も時代のニーズに合わせて変化してきたのでしょうか。

坪野谷:毎年、RSSC では受講生にアンケート調査を行って、その中で受講生から希望する、あるいは期待する科目が出されます。そういった内容について運営委員会で議論し、毎年、数科目程度ですが入れ替えを行い、受講生のニーズに応えるようにしています。ただ、受講生にもいろいろなニーズがありますので、RSSC の理念に沿って最大公約的に望ましい科目を検討して対応しているのが現状です。

森:そういう意味では RSSC では時間をかけて深化させ、いわば「立教モデル」を構築されてこられたのだと思います。ただ、そうであればもっと同様の取り組みが他大学でも広がればいいのと思うのですが、どうして広がっていないか、その理由や広げるためのヒントがあれば加藤先生にお教えいただきたいのですが。

加藤:これもまた難しいご質問ですね。まず RSSC と立教大学の関係ですが、そもそも一般的に大学教員には生涯学習のための教育をするという意識が元来ないのです。どの大学でも教員は自分の研究と学生・院生の教育だけで手一杯なのが現状です。そこにさらに RSSC



のような生涯学習の体系化されたプログラムを新たに大学に導入し、そのための科目も担当しなければならないとなると、「そんなことまで担うだけのゆとりはない」「なにを教えていいかわからない」などといった教員からの反対がかなり出るだろうと思います。ありていに言って、若い教員であれば、「若い教員ふぜいに何がわかるか」とアクティブシニアから怒られそうで怖い（会場笑い）というように怖気づく人もいるだろうと思います。したがって、こういったプログラムを立ち上げるとなると、旗を振る人間は相当苦勞するうえ、全学的な合意もなかなか取れないケースが多いだろうと思います。幸い立教大学の場合は、リベラルアーツという全人的な教養教育が創立以来の教育理念として根付いているので、RSSC の立ち上げの際にも、シニア世代にもリベラルアーツを学んでいただきたいという、理念や意義はすぐに共有され、構築に踏み出すことができました。ただ開校以来試行錯誤を続けており、今の受講生の皆さんから見ても「まだまだ足りない」とお叱りを受ける点もあろうことは十分予想されますが（会場笑い）、実際はなかなか大変でありまして、立教は、なかなか良くやっているほうではないかと思っています。

森:ありがとうございます。ところで、RSSC のサポートセンターの活動などを拝見していると、受講生や修了生の皆さんは、運営面まで主体的に参加され、活動されているわけですが、そのような参加型の仕組みの構築について説明いただければと思います。

坪野谷: RSSC は 2008 年 4 月に開校したのですが、その 1 年前頃から準備委員会を組織して RSSC のあり方について検討を重ねました。その際、受講生の方々をお客様扱いするのではなく、受講生の方々にもいわば共同責任者となっただき、大学と一緒になっ

RSSC を創り上げていくことを方針に掲げ、その方針のもとで今日に至っています。ですの
で、今日のフォーラムも企画から運営まですべて受講生や修了生の有志、受講生のゼミ長
の皆さん、サポートセンターの代表者等に主体的に係っていただいています。

森：大学の理念のもとで RSSC がスタートし、運営の担い手側に受講生や修了生の方々を
巻き込んで今日まで深化されてきたというお話だったかと思います。ところで崔先生に韓
国の状況もうかがいたいのですが、「(株) シニアハブ」「シルバー安心宅配」などといった
取り組みのアイデアはトップで考えて決めているのか、シニア世代の意見なども入って決
めているのでしょうか。

崔：シニア世代の教育を考えたとき、なかなか仕事につなげるのが難しかったので、まず
は外国の先行事例を探しました。そうすると、アメリカに ASA (American Society of
Aging : 全米エイジング協会) という団体があるのですが、そこでは企業、NPO 団体、自
治体などが一体となって活動していました。そこで韓国でも「50+Korean」が中心とな
ってソウル市や志のあるいくつかの企業と一緒にシニア産業協議体を作り、そこでア
イデアを持ち寄って進めてきました。

森：韓国の取り組みで感心するのは企業を巻き込んだ活動がかなり進んでいることだと思
います。以前の文科省の生涯学習フォーラムでは学ぶ側の方は多く参加していたのですが、
企業の方は少なかった印象があったのですが、本日は会場にも企業の方が多くいらっしや
っています。そこで坪野谷先生にお伺いしたいのですが、自治体や企業の方々と大学が
コラボして活動していくことについての見通しはいかがでしょうか。

坪野谷：ぜひそのような取り組みは増えてほし
いと思っています。これまではどちらかとい
うと、CCRC (Continuing Care Retirement
Community : 高齢者居住コミュニティ) のよ
うに、自治体と企業とが一緒になって地域の活性
化を図るような取り組みは広がりつつありま
すが、大学がそれに参画する意義は大きいと思
います。一方で受講生にもソーシャルビジネス



を学びたいという強いニーズもありますので、RSSC でも昨年 11 月に、ソーシャルビジ
ネスの第一人者である永沢映氏に 3 回の夜間講義をお願いしましたところ、毎回 50 余名の受
講生が熱心に参加しました。企業は様々な経営のノウハウをお持ちですが、ソーシャルビ
ジネスにはそのようなノウハウは不可欠です。受講生の約 6 割は企業等の定年退職者です
し、今まで培ってきたノウハウも取り込みながら、また企業の方々にもこうした取り組み
にどんどん参画していただくことがますます必要だと思います。

森：生涯学習や産官学連携はこれまでも文部科学省が推し進めてきた大学政策でもあり、
シニア大学はその一つのあるべき姿のように感じます。今後、日本の大学はシニアの「ア
ンコール・キャリア」(第二の人生でのキャリア) の支援にどう係っていけばいいのかにつ

いて、加藤先生にご意見を伺えればと思います。

加藤：日本の大学の学生は主に高校を卒業した 18 歳～22・23 歳前後の若者で占められていますが、アメリカなどの大学では、いろいろな年齢やキャリアの方々が混在しています。日本の学生たちを見ていると、「同じ年代の人としかつきあえない」傾向があるなかで、同じような意見や考え方で凝り固まってしまい、意表をつくような意見や考えに出会うのを恐れたり、自己主張ができずに、周りの様子や流れを見てしまったりするような傾向があります。こういったことが立教大学も含めて、日本の大学全体が抱えている課題でもあるのだろうと思います。RSSC では「異世代共学」ということを掲げていますが、こういった環境をいかにつくっていくかが、日本の大学全体の課題でもあるのだらうと思います。

森：企業でも、これまでにない商品・サービスを生み出すためには、組織の多様性が重要で、そこでそれをどうマネジメントしていくかが経営の鍵となるといった「ダイバーシティ経営」の重要性が指摘されています。ひょっとすると大学の段階からそのような環境で教育ができれば、シニアだけでなく若者世代も変わってくるチャンスになるのではないかと思います。



さて、ここで会場の参加者の方からもご質問をお受けしたいと思います。どなたかご質問はございますでしょうか。

質問者 1：韓国の年金制度はどうなっているのか、崔先生に伺いたいと思います。

崔：韓国でも年金はとても重要で、公的年金、企業年金、個人年金の 3 本柱で構成されます。ただ、韓国は日本よりも公的年金の制度が遅く始まったので、それほど支給金額は多くなく、日本円に換算して 4～5 万円 (40 万ウォン) 程度しか支給されないことも多いので、それだけで生活することは困難です。ですので、年金以外に働いて収入を得ることが不可欠なのです。

質問者 2：高知大学地域連携推進センターの岡本と申します。今日の崔先生のお話はソウル市内での取り組みが中心であったように思いますが、韓国の地方での生涯学習政策の取り組みについてお聞きしたいのと、坪野谷先生か森様にお聞きしたのですが、「首都圏シニアを高知へ～アクティブシニアブートキャンプ in 高知～」の取り組みで RSSC やプラチナ社会研究会にはお世話になりましたが、その際にシニアの方から見た高知県についてどう感じられたかについてお聞きしたいです。

崔：ソウル以外の地方で熱心に取り組んでいるのは、蔚山（ウルサン）市という釜山のやや北に位置する市で、現代自動車の工場があり、人口は約 100 万人くらいです。「人生二毛作センター」を 2013 年に開設しました。大田（テジョン）市でも昨年センターを開設し、今年は仁川市とソウル市の間に位置する富川（プチョン）市でも取り組みが始まりました。

森：二つ目のご質問については私からお話します。ここ 2 年くらい、首都圏のシニアの方

が地方に行って学ぶという取り組みを RSSC とプラチナ社会研究会が高知市と一緒に
行っています。世界で見ても、人口が首都に集中しているトップ3に東京とソウルが入
っていると思いますが、減っていく地方の人口をどう支えるのかが深刻な課題となってい
ます。日本であれば、シニアの方々の地方移住などが対策として挙げられています。移住
の是非は置いておいて、首都圏のシニアの方々が社会連携の取り組みの一つとして地方都
市と行き来する仕組みはあってもいいのではないかと、ということで始めた取り組みです。
ただ、体験されたシニアの方のご感想については午後からのワークショップでぜひ直接聞
いていただければと思いますが、おそらく居住地から近距離の範囲で始めた取り組みが、
どんどん広範囲に広がっていくことが、アクティブシニアの特徴でもあるのではないかと
思っています。

それでは時間も少なくなってきたので、最後にパネラーに皆さんに一言ずつ、10年後、こ
んな長寿社会になっていたらいいなといったご意見をそれぞれご発言いただきたいと思います。

崔：日本は高齢化対策の先進国だと思っています。韓国の10年度は今の日本を見ればわか
ると思います。日本では今、団塊世代が定年退職して様々な社会活動を始めていますが、
韓国では日本より10歳若い段階から定年後のことを考えないといけません。しかしその準
備が社会的にもなかなか整っていないのが現状です。だからこそ、我々は日本の高齢化社
会の取り組みに注目しており、参考になるような取り組みはぜひ取り入れさせていただき
たいと思っています。

加藤：崔先生、大きな質問に上手にお答えになりましたね（会場笑い）。これは難しい問題
で、RSSCでは入試の際は、事前にエッセイを書いていただき、それをもとに口頭面接を行
っています。エッセイはこれまでの人生を振り返り、今どういうことを考えていて、将来
どういった展望を持っているのかなどについて書いていただきます。そのエッセイを読む
と、それぞれの方がいかに切実な問題を抱えていらっしゃるのかがわかります。中には必
ずしも明確な展望があるわけではなく、入学後にじっくり考えたいという方も多くいらっ
しゃいます。そういった多種多様な人生の先にセカンドライフ、サードライフがあるわけ
です。若い学生が相手であれば、キャリア支援も比較的、一定方向に導くことは可能で
すが、シニアの方々は求めるものがお一人お一人異なっていて、RSSCとしても修了後の社会
活動につなげる支援がなかなかできていないのが現状だと思います。RSSCの受講生はいろ
いろな地域から通ってこられていますが、修了後の社会活動は、まずはそれぞれのご自宅
の近隣から始められることになると思います。そこで何をしようか、どうしようかと考え
たとき、それぞれの地域をうまくつなげるような支援のシステムができるだけ早い段階で
実現されるといいなあとと思っています。つまりRSSCで学んだ方が、地元でも大学などで
さらに学び続けることができたり、地域活動に円滑に移行できたりするような社会が実現
されていることを望みます。

坪野谷：今朝NHKの番組を見ていたら、2025年には65歳以上のシニアの5人に1人が

痴呆症になるということを知り、とてもショックを受けました。痴呆症を防ぐには 3 つの処方箋があるそうです。一つ目は知的好奇心を持って学び続けること、二つ目は適度に毎日の運動を欠かさないこと、三つ目は常に人とのつながりを大切にしてコミュニティとの交流をはかることです。そしてこの三つの要素を満たす場所が RSSC や、豊島区で行っている区民ひろば、あるいは自治体が主催するコミュニティカレッジ等であると思います。これからは、こういった取り組みを産官学が一体となって推し進めていくことがますます重要になると思います。

森：ありがとうございました。以上でパネルディスカッションを終わります。



*会場風景（基調講演時）

立教セカンドステージ アカデミック・コミュニティ (RSAC: アールサック) 設立と概要

RSAC (通称アールサック)は、RSSC (立教セカンドステージ大学) 修了後の活動の場として、同じ想いと志を持つ仲間が2015年4月に設立しました。

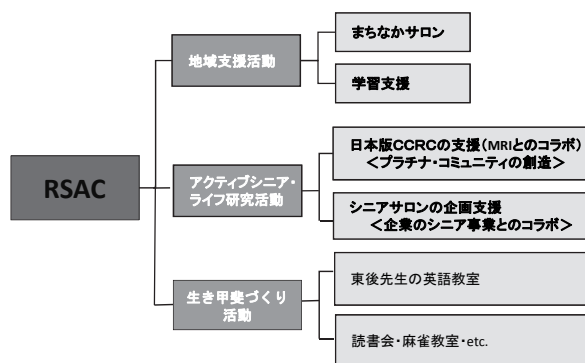
1

設立の経緯

- RSSC(立教セカンドステージ大学) 2014年度の専攻科ゼミで話し合った内容 (卒業後にどのように生きるか・総合研究所の設立も含む) を具体的に落とし込んだ活動の一つが学習支援です。
- RSACは現在34名の会員がいます。それぞれの活動に取り組み楽しんでいます。

2

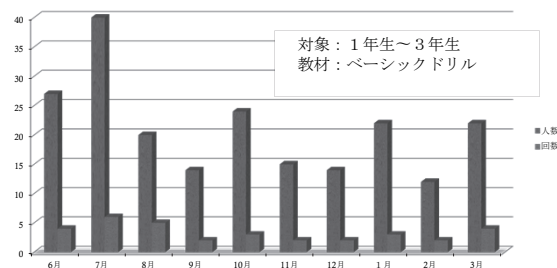
RSACの活動概要



3

実施回数と参加人数 (さくら小学校)

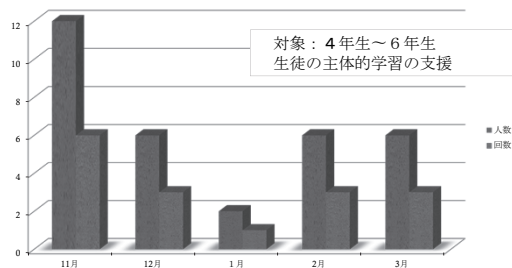
2015/6～2016/3の期間の累計 33回: 210人



4

実施回数と参加人数 (椎名町小学校)

2015/11～2016/3の期間の累計 16回: 32人



5

<まとめ>

- シニアと小学生が共に学ぶ。
シニアは学びを通じてさらに学びを深め、子供たちは学びを通じて努力すること・我慢することを学ぶ。
- さらにシニアの社会参加の機会を増やすためにも、学習支援活動を広げて行きたい。
そのためにも多くの参加者を募りたい。

6

「コミュニティ活動研究会」の概要

1. 2013年2月設立 現在会員数32名
～「としまNPO推進協議会」とのコラボレーション
2. 地域密着型の地域貢献活動の展開
～えんがわ市・いけぶくろ自然クラブ・『シニア変身講座』
3. 居住地における地域貢献活動への波及効果
～居住地のコーディネーター・リーダーの育成

「シニア変身講座」とは。

- 豊島区「区民ひろば」は、世代を超えた交流の場。
- 「シニアの地域デビュー」をねらったアイデアが採用された。
- シニアのおしゃれをプロのコーディネーターのアドバイスによるワークショップ形式。
- 平成26年度 ➡・3カ所 平成27年度 ➡・4カ所実施

“おしゃれ”をして外に出よう？

- 人は誰もがおしゃれをして綺麗に見せたいと願う。
- 年齢に関わらず、ネット上で毎日配信されるファッションスタイル。
- 「おしゃれ」にみえる？ その訳を探ってみよう。

あなたはどのタイプ？

- イメージスケールにより色・デザイン・素材の特色を把握。
- あなたの好みや目指すイメージは？
- あなたの雰囲気やボデーライン・フェイスラインに合わせたイメージはどれ？

イメージ概念を明確に。

- イメージを大きく4つに分類
①エレガント ②モダン ③カジュアル ④ワイルド
- ファッション小物の持つイメージを分類してみる。
- あなたの個性やイメージに合う小物はどれ？

個性に合わせたコーディネート例

- Befor&afterを比較してみる。
- <ステップ>
①目標とするイメージを決める。
②アイテムの選択。
③着こなしの工夫。
- <ポイント>
①重ね着で色の効果を演出。
②手首、足首のロールアップ。

目標は。。。。

- 「あんな風に生きられたら、歳を重ねるのもまんざら悪くないね。」

————

若い人にそう言われたら私たちは満足です。

さあ、おしゃれをして外に出かけましょう！

地域の中で 子どもによりそう ～下町こども食堂の立ち上げ～

NPO法人 台東区の子育てを支援合うネットワーク
(通称:たいとこネット)
石田 真理子
立教セカンドステージ大学 5期生

NPO法人 台東区の子育てを支援合うネットワーク
(通称:たいとこネット)とは・・・。

2003年8月に台東区内の幼稚園児・小学生を持つ親たちが集まって、任意団体として活動を開始。

主に子育て情報誌(季刊)・プレーパーク・子育て講座・環境教育講座等を開催。

でも、子どもが大きくなると、みんな仕事を始め、活動が先細りに・・・。

規模を縮小し、立教セカンドステージ大学へ！

RSSC修了後、活動を拡大！

2015年2月にNPO法人化。

たいとこネットの理念

子どもは自分たちの育つ環境を選ぶことはできません。すべての子どもたちが子どもらしい幸せな子ども時代を過ごしてほしい！そして、未来に希望をつないでほしい。そんな願いを込めて、地域をもっと子育てしやすい場所にするために、活動を行っています。

たいとこネットの活動

- ・0～3歳児向けの親子サロン
- ・子育て支援講座
- ・無償学習支援あすなろ(H25.4～)
- ・下町こども食堂(H26.10～)
- ・プレーパーク活動

学習支援活動を開始して感じた事

- ・小学校時代の学習が定着していない → 分数・小数のできない中学生
 - ・自尊感情が低い子どもが多い → でも、夢は大きい → 理想と現実のギャップが大
 - ・孤食や栄養・バランスの悪い食事
 - ・虐待や家庭・学校に居場所のない子ども達
- 
- ・学習支援だけでは不十分なのでは・・・？

下町こども食堂 開始！

10月22日 第1回 下町こども食堂 さくら ﾌﾟﾚｰ ﾀﾞｲﾅﾐｯｸｽ ﾀﾞｲﾅﾐｯｸｽ

こども 11名 大人 13名 合計 24名が参加してくれました

メニューは

- ・ご飯
- ・里芋とシメジの味噌汁
- ・野菜たっぷり豚肉の生姜焼き
- ・かぼちゃの煮つけ
- ・ポテトサラダ
- ・かき

食材のお米・お野菜は立教セカンドステージ大学の同期生が寄付をしてくれています。
また、地元台東区の飲食店の社長さんたちもお肉やデザートを寄付してくださっています。

NHK「おはよう 日本」での放映

10月22日(木)

第一回 下町こども食堂 さくら プレオープン

10月23日(金)

NHK「おはよう 日本」で私たちの活動が紹介される



ボランティアや食材などを支援してくださる方が
少しずつ増えてきています。

貧困や虐待は可視化が難しい

- ・身近に困っている人がいても、気づかない社会
- ・助けてと言えない人達
- ・孤立化
- ・誰かの手助けがなければ、現状を改善できない状況



困っている人は周囲にいます！

私たちにできる事は？

**Take
Action!**

コミュニティカフェ “ほっとサロン@むさし野”の立上げ

川越市の育児ママの応援
～育児サロン「ほっとサロン」～
大河内千鶴子

I. 活動開始の経緯

1. 助産師として自宅のある川越市の産婦人科病院に永年勤務し、50代も後半になると老後の生活設計や自分のライフワークについてハッキリとした見通しも無く過ぎていました。
2. 立教セカンドステージ大学の新聞広告で「学び直しと再チャレンジ」このキャッチフレーズに妙に心を動かされ、「もう一度勉強をし直したい、何かチャレンジしてみたい」そんな希望が湧いてきました。
3. RSSCの学びでは社会問題や課題、そして何より素晴らしい仲間や先生と出会えました。授業を通して社会や地域課題の問題意識が生まれ、専攻科では仲間と具体的な形に作り上げることが出来ました。RSSCは本当に多彩でユニークな人材の宝庫と思っています。

II. コミュニティカフェの立ち上げ

1. 地域の少子高齢社会の課題解決と30数年培った助産師としてのキャリアを活かす活動の場として考え、第2の人生を歩むことを選択しました。
2. よく男性の定年退職後の地域デビューの難しさが叫ばれていますが、女性も同様にフルタイムで仕事を続けて来ていると定年後の地域デビューはやはり難しいと感じています。
3. カフェ立ち上げは自分の定年後の居場所創りでもあった訳です。

III. サロンの具体的活動

1. RSSC卒業と同時に2014年春、自宅脇にある所有の空き家を使い、隣の奥さんと大学のゼミ仲間の協力のもと、コミュニティカフェ“ほっとサロン@むさし野”を開設しました。
2. 具体的には、週1回毎週木曜日に育児サロン“ほっとサロン”を10時から14時まで、金土曜日はどなたでも参加できる地域カフェ“むさし野カフェ”を8時から12時までそれぞれ4時間オープンしています。
3. 育児サロンの対象はマタニティママと3歳未満のお子さまと育ママになります。

IV. プログラム

1. 特に決まったプログラムがある訳ではなく、入退室は自由です。
2. ランチの持ち込みは自由で離乳期の方々は各自お子さま用とママ用のお弁当を持参。お子さま同士ママ同士でランチを召し上がります。
3. 月に一度、読み聞かせと育児相談に知り合いの保育士さんのボランティア協力を頂いています。

V. 活動の成果と周囲の反応①

1. 小さなお子さま連れで安心してお出かけ出来る場はなかなか無く、サロンはそんな母親にとってほっとする場。
2. ママ同士のお茶やランチは、日中お子さまと二人きりで会話が無いママにとって、何気ない大人同士の会話が刺激と元気を。
3. ご利用中のママがお茶を飲みながら、ため息のように「ああ楽しい...!」と、つぶやかれ「実家から帰って以来、初めて座ってゆっくりご飯を食べた...」と話されたときには、胸が苦しくなるような想いと共に本当に良かったと思う。

活動の成果と周囲の反応②

4. 育児のなかで離乳食は新米ママにとっては難題で、先輩ママの持ち込みランチが大いに参考になり、失敗談や対処方法はママ同士の学び合う場になっています。
5. 昨年の1月には、大学からのご紹介があり読売新聞から取材を受け全国紙でご紹介いただきました。掲載当日にお二人の女性が訪ねて来られ反響の大きさに驚きました。
6. 妊娠期からサロンご利用のママで、1年の育休後仕事に復帰された40代のママから「私も定年後はこんなサロンをやりたい!」と言っていたか人生の先輩として嬉しい。

VI. 今後の活動の展開

1. 出産・育児のためにキャリアを中断して悶々としているママは大勢います。
2. 利用ママの中にアメリカの大学卒業後、英語教室の講師を出産で退職された方があり、その方からのお申し出で、この2月からサロンの空き時間を利用して幼児英語サロンが始まりました。
3. このように、フル勤務は難しいけれど、少しずつでもキャリアを磨けたらという育ママの復帰応援が出来たらと願っています。

VII. 今後の課題

1. 育児支援は生まれてからではなく、妊娠期からの働きかけで、育児がスムーズにスタートすると考えます。
2. 当サロンでも偶然妊娠期にお出かけいただいたママは、産後2か月からのご利用で、40代の高齢にもかかわらずとてもスムーズな育児になった経緯があります。
3. 大抵のママは早くも産後5～6か月を過ぎ、1歳過ぎてご利用のママからは「もっと早くこんなところを知りたかった...」と言われました。

VIII. 行政・企業・住民等への要望

1. 孤独でストレスの多い育児を楽しい育児にするには、周囲の多くの人々の関わりが不可欠です。
近隣社会全体で育児応援する育児環境の構築が、とても大切と思われます。
2. 元気なシニアは大勢いらっしゃいます。私の経験では、シニアの力を引き出すには、教育的な刺激と仲間が不可欠と考えます。
3. この人材育成に官民学の協力と連携があれば、必ず成果は出てくるのではないのでしょうか。

上野原市 西原地域活性化の7年間の取組み



2016.3.2
特定非営利活動法人さいはら
(やまなし大使) 白井誠一

1

上野原市西原地区とは

中央線上野原駅、中央道上野原インターどちらでも車で30分程度にある相模川水系鶴川上流で標高600mの自然豊かな中山間地域にある農山村

<西原地域の人口>

昭和40年代 約2500人⇒ 現在 600人弱

65歳以上人口が50%となって、ついに限界集落

西原地区の学校は統廃合により、
小学校のみ(生徒10名、1年、2年生ゼロ)

2

何故、西原の活性化に取り組んだのか

- ・定年退職後、立教セカンドステージ大学一期生としてNPO、地域活性化、CB(SB)などを学ぶ
- ↓
- ・同じゼミに上野原市議がおり、同地域の活性化活動に力を貸して欲しい旨要請された
- ↓
- ・上野原市役所で策定した活性化案をプレゼン
- ↓
- ・立ち上げ時、RSSCが全面的にバックアップ
(field work ,home coming day,TV出演等)

3

西原地域活性化7年間の取組み

第1期:平成20年12月～

羽置の里 びりゅう館の再建



第2期:平成22年6月～

NPO法人の設立と特産品づくり



第3期:平成25年10月～

「小さな拠点」づくり&高齢者福祉サービス



第4期:平成27年10月～

移住定住促進事業

4

「羽置の里 びりゅう館」について(第1期)

- ・概要:平成13年建築 総費用3億円
農水省(中山間地域農村活性化事業)
- ・目的:都市住民との交流の場(活性化の拠点)
- ・状況:建築当時から住民間で主導権争い
その後も従業員と地元民とのトラブルが
続き赤字経営⇒ 黒字経営
- ・現在:平成23年から指定管理はNPOさいはら

5

NPO法人さいはらの設立(第2期)

- ・平成22年6月23日 法人成立
会員数22⇒50人
- ・目的(設立当時)
 - ①「羽置の里 びりゅう館」を拠点に活動し、地元特産品の開発販売によるコミュニティビジネスを展開する
 - ②イベントの企画・実施など西原地域のPR活動を通じて、首都圏はじめ他地域の住民に西原への来訪および移住を推進する

6

限界集落に近づきつつある西原地域で、
今迄のような活性化の取組みは、
本当に住民が望んでいるものなのか！！

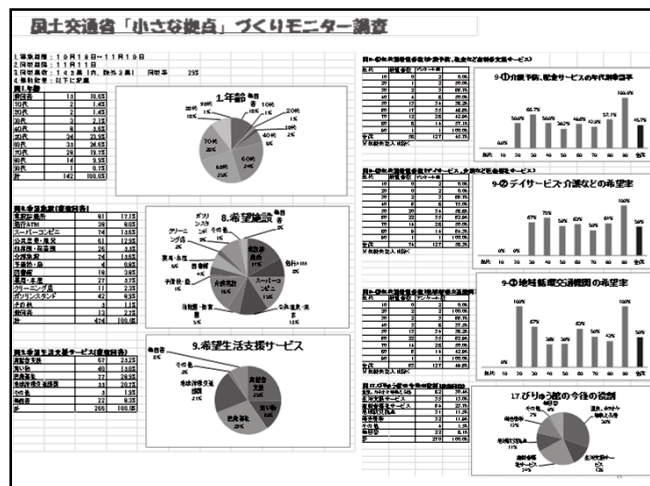


平成25年7月 国交省過疎地対策「小さな拠点」
づくりモニター調査に申請⇒ 採択(全国12地域)



モニター調査の一環として
西原地域全世帯アンケート実施

7



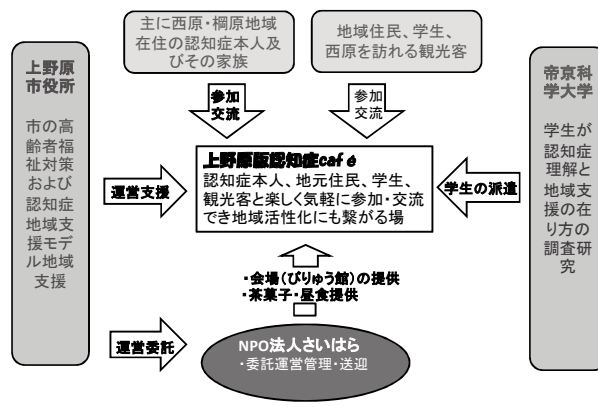
「小さな拠点」づくりの取組み(第3期)

既存の交流施設を活用し、地域住民が“楽しい”を共有(集える)できる高齢者支援サービスを提供する「小さな拠点」づくりを目指す
＜主な高齢者支援サービスの取組み項目＞

- 1.介護予防サービス
- 2.認知症予防カフェ
- 3.送迎車両(地域内循環交通)
- 4.配食サービス
- 5.福祉避難所の役割

9

上野原版認知症カフェイメージ図



移住定住促進事業への取組み(第4期)

- 1)空家バンク登録促進
- 2)農業体験民宿業(簡易宿泊所)農家の探索
- 3)移住定住者と地元住民との交流などの移住後フォロー体制の構築
- 4)田舎暮らし・農業体験ツアーなど
- 5)空家マッチングツアー、子育て世帯ツアー

11

豊島区と秩父市のシニア交流・共生プロジェクト推進

立教セカンドステージ大学社会貢献活動サポートセンター
RSSCプラチナ社会創造研究会

【長寿社会における生涯学習政策フォーラム2015in立教大学】
2016年3月2日

立教セカンドステージ大学社会貢献活動サポートセンター

RSSCプラチナ社会創造研究会

「三菱総合研究所プラチナ社会研究センター」
との連携を中心に
「プラチナ」のようにキラキラ輝く
“セカンドキャリア”の創出と少子高齢社会における
諸課題の産業化を目指す研究活動

2013年度(5期生)から開始、
2015年度(7期生)に現在の組織体制となって活動

現在の登録メンバー:7期生25名、8期生15名

定例の研究活動(2015)

5月「三菱総合研究所(MRI)森卓也主席研究員を迎えて」

- ・これからのプラチナ社会研究会とRSSCへの期待
- ・三菱総研との連携のいきさつ 講師:坪野谷雅之先生

6月「いま話題のCCRCとは」 講師:MRI松田智生主席研究員

- ・そのルーツから地方創生における日本版CCRC構想へ

7月①「地方創生を考える」～人口減時代の救世主になるか

講師:坪野谷雅之先生

- ②「スマートコミュニティ稲毛」見学・講演:染野正道社長
(マンション+アクティビティ=アクティブシニアタウン)

9月①夏合宿セミナー「地方創生と観光」

- ・別荘地軽井沢の誕生と世界のリゾート

講師:跡見学園女子大学教授 安島博幸 先生

②「高知県まち・ひと・しごと創生総合戦略」について

- ・人口減少による府のスパイラルを克服し、高知県人口の
将来展望の実現を目指す!

講師:高知県産業振興推進部 チーフ 濱田賀夫 氏

10月「杏林大学が三鷹市と連携する大学版CCRCの取り組み」

- ・都市型高齢社会の健康と安心に向けた挑戦

講師:杏林CCRC研究所 蒲生 忍 先生

前年までの「まちおこしプログラム」の取り組み

- ・2013年 4月 山形県「南陽市プラチナコミュニティ・提言」
- ・2014年11月 高知県「シニアブートキャンプin高知・企画提案」

2015年10月 高知県「高知セカンドステージ塾」

～“第2の人生”は、土佐の山間よりいづ～

“社会課題の最前線”にセカンドステージの萌芽がある

- ・中核都市と山・海・川の自然が近接し、首都圏等から多くの移住者を惹きつける
- ・少子高齢化・過疎化の課題先進県で、先進的取り組みが進む高知に学ぶ

- ・高知県、高知市、NPO土佐山アカデミー、高知大学等を訪問

主 催:三菱総合研究所プラチナ社会研究センター
企画協力:RSSCプラチナ社会創造研究会、NPO法人土佐山アカデミー

豊島区と秩父市のシニア交流・共生プロジェクト

- ・平成26年5月、日本創成会議(増田寛也座長)によって発表された全国自治体の将来人口推計により、東京都豊島区が23区唯一の「消滅可能性都市」とされた。

(豊島区の人口増は転入が支えており、2040年までに20-39歳の
女性が半分に減る恐れがあって消滅可能性のある自治体とされた)

- ・豊島区・・・面積13.01km²(23区中18位)、立教大学が所在、
人口280,228人、人口密度215.4人/ha、(日本一高密都市)
高齢化率 20.3%、単身高齢者比率32.4%(全国16.4%)
- ・これをうけ豊島区は「消滅可能性都市」から「持続発展都市」とす
るべく対策本部を立ち上げ、未来を切り開く政策・施策を本格的
に検討してきた。

豊島区と秩父市のシニア交流・共生プロジェクト

- 平成27年8月、高野之夫・豊島区長と増田座長、久喜邦康・秩父市長が会談し、日本版CCRC構想にもとづいて豊島区と秩父市が共生を求めて取り組んでいくことが確認された。
- 豊島区＝秩父市：姉妹都市提携(昭和58年)、防災協定(平成7年)
- 池袋＝西武秩父 約70km 西武鉄道特急電車で90分(片道1,420円)
- 平成27年12月、立教セカンドステージ大学から首都圏のアクティブシニア集団として、両市区のシニア交流・共生について提言をさせて頂きたいと高野区長へ申し入れ、快諾を受けて「豊島区・秩父市シニア交流・共生プロジェクト」の発足に至った。

豊島区と秩父市のシニア交流・共生プロジェクト

- 平成28年1月、RSSC受講生10名、坪野谷顧問、MRI森研究員でチームを編成し、直ちに豊島区を訪問し、豊島区のこれまでの高齢者対策などの取り組み状況と「定住・地方移住等に関する区民意識調査」の結果について聞き取りを行った。

「定住・地方移住等に関する区民意識調査」

(平成27年11月実施)(速報値)

「地方へ移住してみたい」32.6%、そのうち「秩父市へ移住してみたい」20.6%。
 「地方へ移住したくない」65.9%、その理由は「交通の利便が良くない」62.7%、
 「買い物の利便が良くない」55.1%、「今の環境を変えたくない」47.5%。「秩父市へ移住したくない」76.9%、その理由は「親しみのない場所」45.8%、「秩父市を良く知らない」45.6%、「交通が不便」29.6%であった。

(区内に居住する20歳以上69歳まで5000人無作為抽出・36.3%回収)

豊島区と秩父市のシニア交流・共生プロジェクト

- 平成28年2月、プロジェクトチームと豊島区役所メンバーが合同で秩父市役所へ第1次訪問を実施した。
- 秩父市……面積577.7km²(埼玉県の1/6) 山林87%
人口65,256人(26,353世帯)、高齢化率 30.3%、
- 新井秀弘市長室長はじめ秩父市版CCRC検討委員会幹部の方々から、福祉、産業、観光、林業、雇用、空き家バンクなど、秩父市の概況とさまざまな取り組みについて説明を受け、活発な質疑応答を行った。
- 「秩父神社・秩父まつり会館」、「じばさん(地場産)センター」、「道の駅ちちぶ」、市街地の散策など旧市域の主なところを視察した。

豊島区と秩父市のシニア交流・共生プロジェクト

◆これまでの取り組みでプロジェクトが把握したこと

<豊島区>

- 「消滅可能性都市」から「持続発展都市」へ対策を推進中
～対策本部の立ち上げ、定住・地方移住に関する区民意識調査の実施
- 特養の増設が課題であるが区内にこれ以上の余地はない。
- 区民の秩父市への関心は必ずしも高くない。

<秩父市>

- 秩父版CCRC検討委員会を立ち上げて検討を実施中
- 歴史・文化・自然という魅力は、人口減の歯止めにならない。
- 住民の地縁関係が健在、特養等の不足感はなさそう。
- 「ちちぶ版地域包括ケアシステム」の構築準備中

豊島区と秩父市のシニア交流・共生プロジェクト

◆交流・共生を実現させるための提言(主な事柄)

- 交流・共生の機運醸成
小学生から高齢者まで幅広い世代で様々な交流の接点を作る。
- Win=Winの関係を構築
豊島区の特養を秩父市に用地を求めて設置し、要員を雇用する。
豊島区内の大学など文化機能を活用して秩父市民のためのアカデミックな機能を作る。
- 豊かな自然・文化を生かした受け入れ体制の構築
耕作放棄地で菜園など趣向に合った移住希望者向け空き家提供など
- 交流・共生の推進
観光リピーター・ショートステイ・二地域居住・移住の流れの構築など

豊島区と秩父市のシニア交流・共生プロジェクト

第1次の調査活動が終了した。3月中に報告書を提出する予定である。しかし、これまでは、いわば予備調査であって、今後行政の動向に呼応する形で、調査・研究活動に加わり、首都圏在住のアクティブシニアの立場で提言をしてゆく予定である。

RSSCプラチナ社会創造研究会

- 本研究会は、立教セカンドステージ大学に在籍する現役の受講生が運営の主役になる。
- 現役生は「プラチナメンバー」、修了生は「ゴールドメンバー」とよぶ。
- RSSCを卒業しても、意欲のある者は、様々な企画に参画し現役生とともに研究活動に参加してゆく。プラチナのようなキラキラと輝く充実したセカンドライフを実現するために。

立教大学、文部科学省 主催
「長寿社会における生涯学習政策フォーラム2015」

「丸の内プラチナ大学」構想

～定年退職前から始めるセカンドキャリア準備のプラットフォーム～

2016年3月2日

MRI 株式会社三菱総合研究所
プラチナ社会研究センター 主席研究員 森 卓也

Copyright (C) Mitsubishi Research Institute, Inc.

自己紹介 森卓也（もりたくや）

所属

■ 三菱総合研究所 プラチナ社会研究センター

専門：

■ 産学官連携による社会課題解決・新産業創造

著書・講演等：

■ 「シニアが輝く日本の未来
高齢社会への挑戦」
(丸善出版)

■ 「大学生が狙われる50の危険」
(青春出版社)



Copyright (C) Mitsubishi Research Institute, Inc.

2

プラチナ社会とは？

高齢化問題と環境問題を解決した新たな社会像

- 課題先進国から課題解決先進国
- プラチナのように輝く社会



三菱総研小宮山理事長

Copyright (C) Mitsubishi Research Institute, Inc.

プラチナ社会 日本が先進国

活力ある高齢社会
環境サステナブル

これまでの社会～先進国は欧米

物質的な豊かさ

- 環境問題
- 高齢社会
- 需要不足（雇用問題）

社会の進化

3

アクティブシニアが活躍するためには？

産学官で2年間議論し、見えてきた「3つの鍵」

- 同じ志を持つ仲間
(チーム形成)

集う場

- 試行錯誤・失敗の機会
(つまみ食い)

挑む場

- 他者に学ぶ & 伝える
(半学半教)

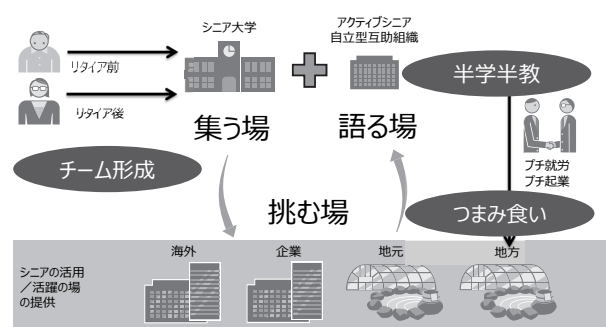
語る場

Copyright (C) Mitsubishi Research Institute, Inc.

4

3つの鍵を実現した仕組みが実現できないか？

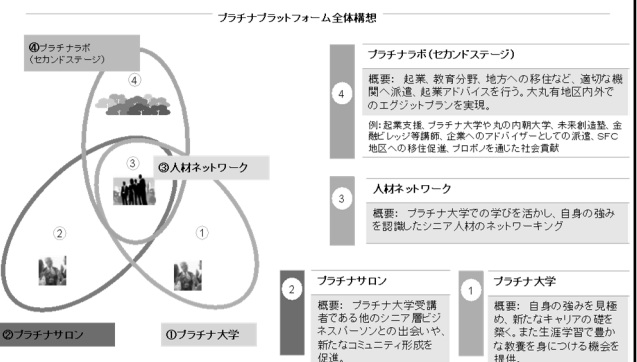
「学ぶ」だけでは不十分 → 「集う」「挑む」「語る」を付加



Copyright (C) Mitsubishi Research Institute, Inc.

5

丸の内プラチナプラットフォーム構想とは？



Copyright (C) Mitsubishi Research Institute, Inc.

6

第三部 ワークショップと発表会報告

「生涯学習から高齢者による地域活性化へのネットワーク作り」

第3部では、フォーラム参加者が7つのグループに分かれてディスカッションした後、各グループの代表者が発表を行った。ここでは、それぞれの発表の内容をもとに、話題ごとに整理・統合し、再構成したものを要旨として記載する。(加藤睦)

○生涯学習について

- ・時代の変化に応じて学ぶ内容・学び方も変えていくべきである。
- ・立教セカンドステージ大学のような生涯学習は、本来、社会貢献を目的としそこに直結するものではないはずである。大切なのは、たとえば定年を迎えた後で、いったん人間をリセットすることであり、そのためにさまざまなことを学んで、人間を再形成し、その後で、いかに社会に恩返しができるか、ということにつながるのだと思う。
- ・地方では、たとえば地元で大学が存在しない場合など、生涯学習の展開自体が難しいケースも多い。



○生涯学習から地域活性化へ

- ・生涯学習で知的好奇心を満たすことと、社会的課題の解決に向けて活動することをどのように統合するのが難しいと考えられがちだが、学習にせよ活動にせよ、まず楽しむことが大切である。
- ・一人では何もできないので、ネットワークが必要である。生涯学習の場が、ネットワークの形成に役立つことも考えられる。また、ネットワークを作る方法として、SNSの活用が有効と考えられるが、生涯学習の場で、SNSの活用法、さらにネットワーク造りの方法などを学べるとよいと思う。
- ・活動を開始する際には、コンセプト・目標設定が重要である。それを可能にする役割が生涯学習に期待される。現在どのような地域の課題があるのか、シニアの活動へのニーズがどこに存在するのかを知り、メンバーの問題意識の共有をはかる方法などを学べることができる。



・同じ世代を構成する人々の、多様な考え方を知り共有するために、生涯学習の場でシニア同士の議論や共同研究を行えることが効果的である。

・シニアがこれまでのキャリアで獲得したスキルを大事にすべきである。その一方で、足りないスキルを補うことも必要である。特に、大企業での勤務経験者は、コミュニケーションのスキルが不足していることが多く、生涯学習の場でこれを習得できることが望ましい。

・自治体の生涯学習からは、なかなか現実の活動までつなぐことが困難なケースが多い。その意味で、立教セカンドステージ大学のゼミ活動・研究グループの活動は興味深く、参考になる。

○地域活性化について

・シニア世代、特に男性の「引きこもり」を防ぐ仕組み作りが必要である。地域に何らかの活動の場が用意されていることが望ましい。その場では、地域の女性・子供などを含む異世代協働、異世代交流が行われることが重要であろう。サービスを受ける側とサービスを提供する側とのネットワークもそこにおいて形成される。



・既存の活動の場がない場合は、自分たちで作るという意識も必要である。

・地域と関わる意識の希薄な男性の場合、たとえば退職の少し前から、どこにどのような場があるのか、どのような活動が行われているのかについて、アンテナを張って情報収集に努めるとよい。行政も各種団体も、存在する活動についてさらに積極的に発信してほしい。

・自分の活動や貢献が「評価」されることも重要で、何らかの対価がわずかでも得られる仕組みもあってよい。

・活動の財政基盤が重要である。NPO、ボランティアであっても、活動のための原資がなければ、持続的な活動も、広報もできない。逆にいえば、原資がなくても、持続的に活動できる方策を追求することも必要である。有償の活動を行うのも、その方策の一つであろう。

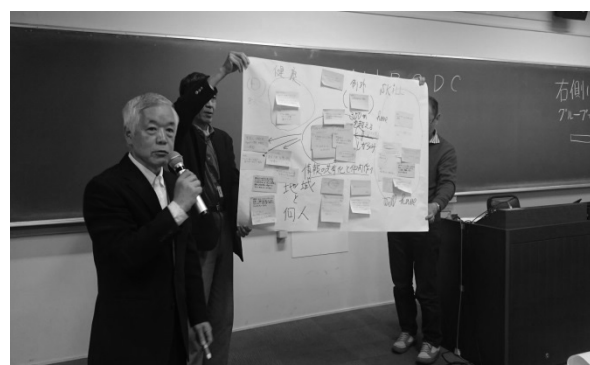
・地域における活動の経済的な裏付けについては、地方自治体・企業のサポートの仕組みづくりも必要である。

・団塊世代は、新しい活動の方に関心があることが多く、既存のコミュニティーへの参加が必ずしも進まないようである。「地域」を狭く捉えず、広く自由な発想でコミュニティーを形成することも必要となろう。

・「何かしたいのだが、どこでどう始めればよいのかわからない」という問題については、

いきなり大きな活動を考えるのではなく、小さなチャレンジを積み重ねて行くのが効果的であり、楽しくもある。新たに立ち上げる場合は、グループも数人で開始すればよい。

- ・二十歳前後の学生たちが、アクティブシニアの活動を知らないケースが多い。情報をより多く発信しないと、多世代協働はなかなか実現しないのではないかな。
- ・たとえば、子育て支援のような活動が、複数の地区で行われている場合に、横のつながり（ネットワーク）があればよいと思う。
- ・若者（40代、50代も含む）に関心をもってもらい、その参加を促すことも必要だ。
- ・自分が健康であること、活動を楽しむことが、活動を長続きさせる基本となる。
- ・地域デビューは困難だと考えられているが、地域の活動に勇気をもって名乗り出れば、すぐに受け入れてもらえるだろう。地域では、シニアの参加を待っている。



*各グループの発表風景（抜粋）

全体総括

株式会社三菱総合研究所 森卓也

1. 第一部 基調講演とパネルディスカッション

第一部では、50+KOREAN 研究所長の崔相泰氏、立教セカンドステージ大学（RSSC）兼任講師・RSSC サポートセンター顧問の坪野谷雅之氏による、韓日それぞれの「生涯学習と高齢者の社会参画」に関する基調講演が行われた。韓日の生涯学習の違いを一言で表現するならば、

- 韓国における生涯学習：「セカンドキャリアに向けた新たなスキル習得」
- 日本における生涯学習：「新しいライフスタイル創造のための自己研鑽」

である。実質定年が早く年金制度の歴史も浅いため、高齢期就労への切実なニーズがある韓国シニア。定年延長や再雇用もあり日々の生活には困らないが、退職後の有り余る「自由時間」をいかに生きるかという難題に挑む日本シニア。同じ「高齢化」でもそれぞれの社会・歴史・文化によるアジェンダ設定に違いがあり、その解決策である「生涯学習」のあり方の違いとして現れている。他方、韓日の共通課題として「首都圏への一極集中」がある。ソウルや東京のシニアは充実した生涯学習を活用し「第二の人生」に一步踏み出すことができるが、地方に住む高齢者はどうするのか。地方創生という韓日共通のアジェンダに対し、韓日それぞれの高齢者がどのような選択をするのか、今後に期待したい。

2. 第二部 事例報告とコメンテーターとの対話

第二部では、RSSC 修了生による地域社会活性化の事例報告が行われた。多種多様な成功事例があった中、共通点を挙げるならば「地域社会には” 知的刺激 ” がある」ことであろう。地域社会が抱える課題を解決することは、人生で積み上げてきた知識・経験・人脈を総動員する価値のある魅力的な知的活動（ナレッジワーク）である。また生涯学習の真価が試される「卒業後試験」とも言えよう。” 成功 ” の影には数えきれない失敗があったと予想するが、それこそが「第二の人生」に悩むシニア世代に最高の教材だ。地域社会活性化に挑戦した RSSC 修了生が” しくじり先生 ” として失敗談を明るく語る授業を是非実現して欲しい。

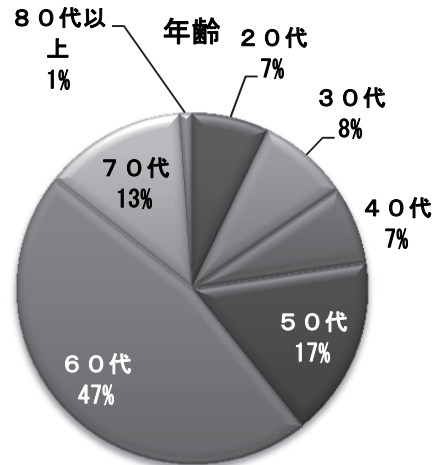
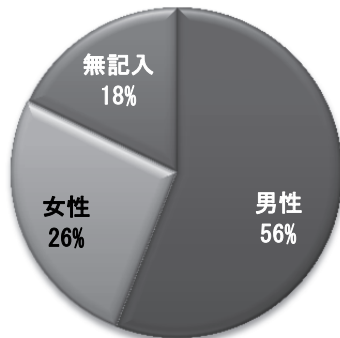
3. 第三部 ワークショップと発表会

第三部では、第一部、第二部の内容を踏まえ、「生涯学習から高齢者による地域活性化へのネットワーク作り」というテーマについて、ワークショップ形式で討論と発表会が行われた。発表会の最後に私がコメントさせて頂いたことを再度述べさせて頂くならば、地域社会で活躍するシニアには、一步踏み出せない次の世代（ネクスト・シニア）を引き上げて欲しい。そのための仕組みとして「大学」は最適の場である。高齢社会は自分達だけが活躍して楽しむ「高齢者会」ではない。シニア世代が次の世代を牽引する「日本版高齢社会」こそがプラチナ社会である。2020 年オリンピックイヤーに、高齢社会における新たなライフスタイルを世界に発信する広告塔として更なる活躍をシニア世代に期待したい。

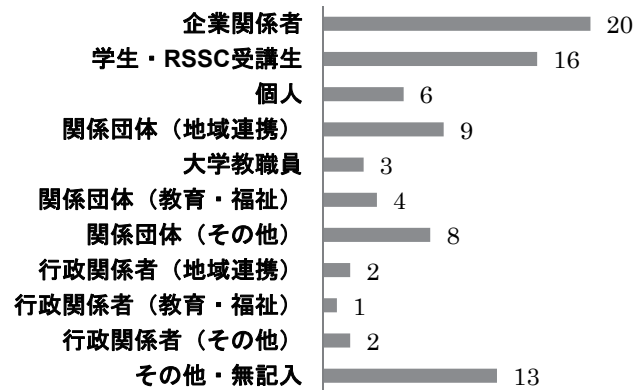
アンケート集計結果

(参加者の属性)

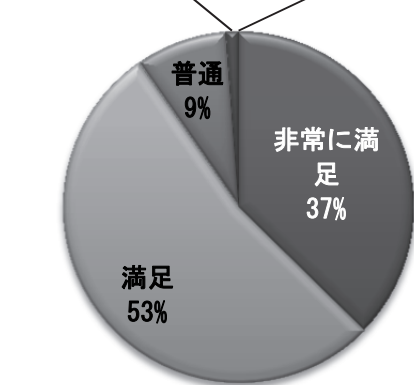
性別



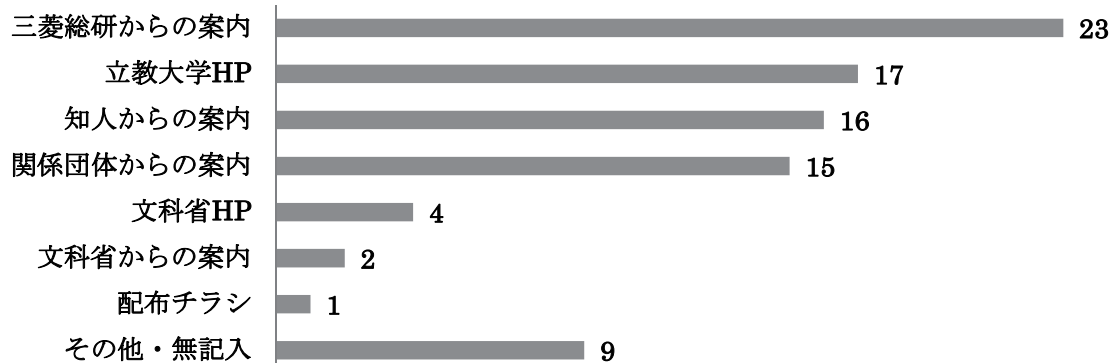
所属



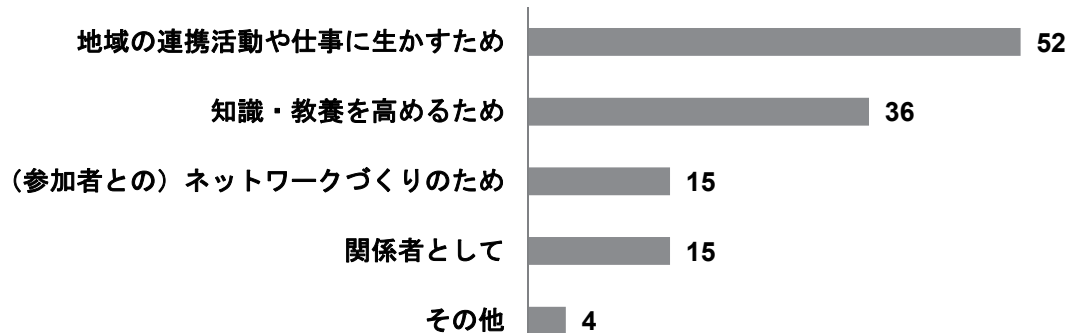
参加評価



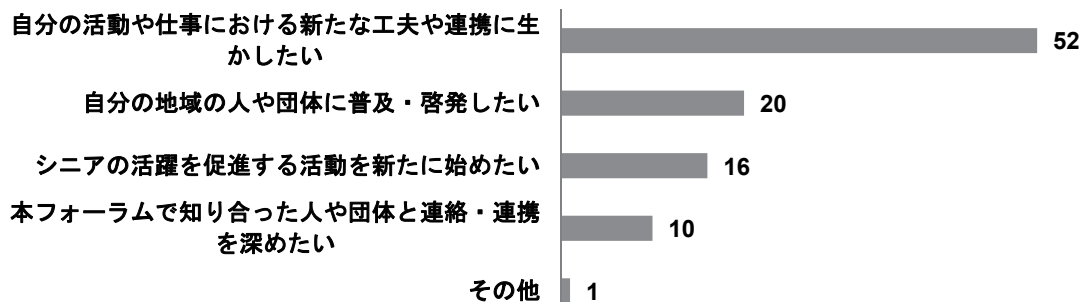
本フォーラムを何で知ったか



フォーラムに参加した目的



フォーラムで得た知識や経験を今後どのように活かしていきたいか



(全体評価コメント) (抜粋)

- ① リアルな最先端の取り組み、姿、マインドが解りとても有益でした。
- ② 一番印象強いのは、韓国と日本の危機感の差。バックボーンが違いすぎる。日本人の甘さが良く出ていた。日本にもシニア財団はあると思うが、活動はどうか？
- ③ 皆様のいきいきした顔が印象的でした。頼れるシニアに頼っていける環境が欲しいと常々思っていました。皆様に敬意を表します。
- ④ 学び（生涯学習）、社会貢献も大事だが、意識を通じて、経済がまわり日本社会が元気になっていくようなシニアの知見を生かしたビジネスモデルの開発にもっと注力してほしい。それが難しいのなら、せめてどこに課題があるのかを提示してほしい。学び（input）だけでは日本はかわらない。お金がからまないボランティアでは持続可能でない。
- ⑤ CCRC に取り組むにあたって、本日発表があった内容は不可欠だと思い参加しました。
- ⑥ 韓国のビジネスにつなげる事例が大変参考になりました。
- ⑦ RSSC 卒業生の方々が実際、具体的にどう活躍されているのかが、よく伝わってきました。実践重視のフォーラムで、とても良かったです。
- ⑧ 「高齢社会対策は産官学民の総力戦」とは、高齢社会 NGO 連携協議会（高連協）の樋口恵子共同代表が5年前（以上）に発した名言。今日のこのフォーラムは正にその体現として、新たな可能性と実行力を宿すものとして成長していくことを切に望みます。どんなに学んでも、それを活かして働き、消費する社会にならないと長寿の国の幸せは訪れないと思います。

- ⑨ 高齢者の方が皆さん生き生きとされている様子を（この場だけですが）見ることでとても楽しかったです。多様なセカンドライフスタイルがあることを知りました。
- ⑩ 基調講演、韓国の生涯学習の取り組み、立教大学の皆様の取り組みを知ることが出来、感銘しました。事例報告、どの報告も大変参考になりました。
- ⑪ 地方自治体、大学、企業など多分野、若い年代の方々と話ができて、名刺交換を含め、有意義なフォーラムでありました。ありがとうございました。
- ⑫ RSSC の学びが、地域活動につながっていることを知り、単なるシニアの学びで終わっていないのが知られてよかったです。今は、活動者の方のモチベーションが高く、且つ、年令も若いのでよいと思いますが、10 年後の継続性、別の団体の育成も課題として取り組んでいただきたいと思います。
- ⑬ 高齢の方々が生き生きと、多様な取り組みをされていることを知ることができ、とても見識を広めることができました。どの部も大変充実した内容で、楽しませていただきました。
- ⑭ 大変有意義な会でした。基調講演は韓国の事例も含め知見も広め深められました。事例研究は多岐にわたり活躍していることを知りました。午後のディスカッションも多くの人の話がきけてよかったです。
- ⑮ RSSC について余り良く知りませんでしたが、今回のフォーラムに参加して少し知識を得ることができました。韓国の 50+ の事例は大変参考になりました。事例もどれも関心がありました。参考にもなりました。GD も大変に刺激的でした。
- ⑯ 様々な立場にある人々から、高齢者を対象とした生涯学習及び今後目指すべき社会の在り方についてお話を聞くことができ、大変勉強になりました。時間的にもちょうど良い配分であると感じました。
- ⑰ 社会活動に対し、意欲的な高齢者の方々とお話でき、とても勉強になりました。20 代として、どのように、このような想いとつながり、社会に活かしていくか考えたいと思いました。
- ⑱ 第 2 部での事例報告はこれからの生き方を考える上で参考になりました。実際に活動されている具体例であるため、とても説得力があるものばかりでした。できれば各事例とも失敗談やうまくいかないことなどをもっと聞ければよかったと思います。

（本フォーラムで得た知識や経験を今後どのように活かしていきたいか）

- ① 今、私の属している団体 98 才～60 才の方々約 70 名 平均 80 数歳 行事をやっても参加するのは約 20～10 名それも決まった方々。介護施設に入っている方もおられるのですが、どう参加意欲を生むか、若い方々の事例は多いのですが、高齢者の事例は少ない。今日の事例も含めて役員の方々と検討したい。
- ② 仕事柄、多くの介護を必要とする方と関わってきました。介護サービスの必要性を感じつつも、今後はもっと対象を広げたサービスを構築したいと思っています。介護保険においても、軽度が切り捨てられる中で、その前のコミュニティ活動フィールドがあることが、とても大切だと思います。RSSC で学ばれた方々の活動が地域で広がり、介護のお世話になりたくない人、介護サービスを受けられない人に届くことを願っております。
- ③ 私自身も NPO 活動をしています、自分たちの発表の場、広報する場がもっとあればと思いました。大河内さんが言っていたように、RSSC でも横のつながりは結構できつつありますが縦のつながりをコーディネートする組織があってもいいと思いました。その役割を自分たちができないかとも思っています。

（今後取り上げて欲しいテーマ）（抜粋）

- ① 地域活動として 10 年以上前より、障害者のサポート、ボランティアをしています。年毎、一名ずつ増加するものと期待しておりますが、10 年以上経っても参加者が増え

ないのです。シニア地域参加の動機づけになるような取り組みもお願いしたい。

- ② 中高齢者が学習する場合の資金補助（特に国公立大学入学）について、これを向上させて欲しい。
- ③ 「1億総活躍」・「高齢者の活動」が実現する社会システムの構築に関すること。人材バンクのフル活用←企業や団体（受け皿）への働きかけ。（人と人、人と企業をつなげるシニアと次世代者がつながる考えをもって）。ハローワークとつながるような研究を！働きたいシニアがたくさんいます。現状では、清掃業務などしか活躍の場が開かれていません。
- ④ 少子高齢化社会を迎え、RSSCのように生涯教育を「単なる趣味」から「より実践的、社会貢献的なもの」にして行う制度が必要であると思われる。例えば、独のマイスター制度のようにシニアの再就職に役立つ職能資格制度を厚労省、経済省などとともに国家資格化していくことが重要。この具体的取組みについて具体策について聞きたい。
- ⑤ 生活の苦しい高齢者には、生涯学習の場、コミュニティに参加するだけの少しのおこずかいが無いために、自宅から出てこない方が多いと思います。そういった方でも参加できるコミュニティの仕組やそういう人がちょっと活躍して、少しのおこずかいが得られる仕組、こういうものは、国が力を入れて作って欲しいです。そのコミュニティの運営は、アクティブシニアができると思います。
- ⑥ 生涯学習の出口としての高齢者の受け皿作り、活躍の場作りに資する。
- ⑦ リタイアした団塊世代に外に出てボランティア活躍に参加する第一歩を推める為の広報活動をもっと広く、強くよりお願いしたい。
- ⑧ 「学び直し」のしなけを強化して欲しい。（一億総活躍の実現には、スキルの棚おろし、不得意分野を知ることが必要だと考えます。己を知って次のステップ、役割を見極められるものと考えます。）
- ⑨ シニアが活躍している事例、場、人間等をより広く広報して頂きたい。
- ⑩ 退職後、地域の活動をしない人への働きかけを、どのようにすれば良いのか
- ⑪ シニアを研究するにあたって、定年後（自立）→要介護状態になるまでのシニア世代の生活スタイルやニーズが非常に分からず、サービス創造につながらない。シニアのありあまるパワーを有効活用することもよいが、そこに企業のノウハウが加われば、もっとスピードUP、エリア拡大にもつながるのではないかと。良い取組みが地域に埋もれない情報発信がされることを願います。
- ⑫ 助成制度、ポイント制度。手をあげた大学（地方）への助成及び、参加者への助成。都会と地方大学間の連携（静岡市に希望）
- ⑬ 各シニア大学の取組みについての発信（シニア世代だけでなく）
- ⑭ 子ども対策と高齢者対策を別々に考えるのではなく、みなさんが取り組んでいる事例のように子どもと高齢者がともに活動的になれるような取組みを一緒に考えて欲しいと思いました。

（その他コメント）（抜粋）

- ① 立教大学のキャンパスを借りることで、学際的且つ生き活きとした学びの場の実感が強まり、RSSCの皆様にご感謝申し上げます。就活キックオフのこの時期、第2ステージとして「長寿社会を生き抜く就職とは」というテーマのフォーラムを設け、就活セミナーに新風を吹き込んではいかがでしょうか？RSSC 卒業生すべてが講師に成り得るでしょう。それこそ学内の“知”の循環であり、多世代交流、スーパーダイバーシティだと思います。
- ② 今回は韓国における基調講演でしたが他の諸外国での高齢者の社会参画の話を聞きたいと思いました。中国、ベトナム、タイなどアジアやスウェーデン、ノルウェーの北欧など。